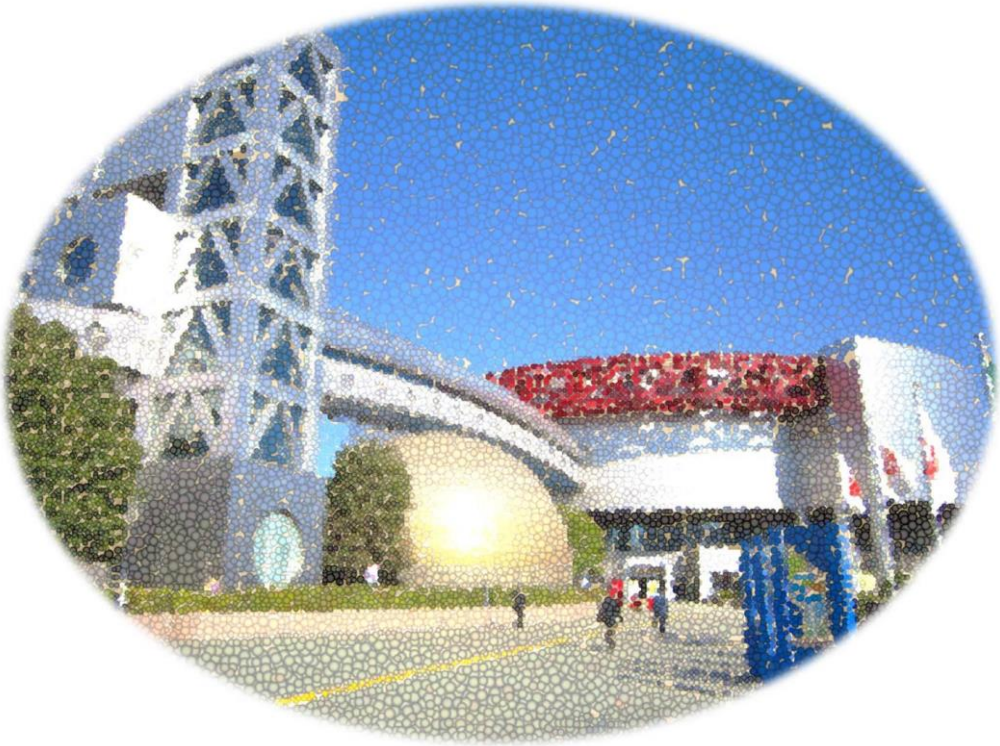
平成 30 年度

英語教育アドヴァンスト研修

授業改善プロジェクト 報告書

ーアクション・リサーチによる高等学校英語授業の実践ー



神奈川県立国際言語文化アカデミア

はじめに

神奈川県立国際言語文化アカデミア　所長
大久保　　博

ひと昔は新鮮なイメージを伴った言葉であった「国際化」が使われる機会が減り、これに代わり今や「グローバル化」「ボーダーレス化」といった言葉がすっかり定着しました。市場経済や情報をはじめ様々な物・分野が地球規模で広がり、共存関係や連鎖性が高まるとともに、世界の異なる文化や価値観に出会う機会も増えています。

その一方、競争の激化や格差拡大が進み、また伝統的な価値観や文化的アイデンティティが失われつつある中、将来に対する不透明感や不安が広がり、こうしたことが人々の内向き志向や他者への不寛容、排他意識につながっているのではないかとも指摘されています。

さらに、高齢化や人口減少等に伴い、我が国の世界的プレゼンス低下が叫ばれており、“経済大国ニッポン”のメンバーという“アドバンテージ”も過去のものとなりつつあります。

これまでの国や社会の枠組みに頼り切ることができず、一人ひとりがグローバル社会の波に直接さらされるようになる中で、これからの若い人々が自立した個人として持てる力を発揮し、また充実した生活を切り開いていくためには、異なる歴史・伝統・文化を持つ世界の人々と、互いの違いを認め合い、また共に関係を結ぶ、「多文化共生」「異文化コミュニケーション」を築いていくことが不可欠となっています。その基礎となるのは、自らの考えをきちんと発信していくためのコミュニケーションツールとして、事実上の世界共通言語である英語力を高めることにあるのではないでしょうか。

国際言語文化アカデミアでは、「国際社会で活躍できる人材の育成」を使命の一つに掲げ、県教育委員会と連携して「外国語にかかる教員研修事業」を進めていますが、その事業の柱として、施設発足時から、学校や地域で中核的な役割を担う英語教員の人材育成を計画的に行う「英語教育アドヴァンスト研修」を実施しています。

この研修は、教員一人ひとりが自分や生徒たちと向き合い、授業改善に向けた課題を調査・発見・整理したうえで、課題解決方策を主体的に設定し、授業を通じて生徒と共にこれを実践していく授業改善プロジェクトであり、さらにその実践結果の検証（課題解決の達成状況、自己や生徒の変化）を自身で行う（振り返る）ものです。研修においては、当所のスタッフが集合研修・授業訪問など継続的な指導・助言を行いますが、教員自身が研修の主体として積極的にチャレンジしていくこと、授業中に行う研修であること、課題発見から結果検証等一連の流れを論理的に展開すること、生徒との信頼関係を深めながら協力して授業改善に取り組むことなどが特徴といえます。

この研修も本年度で８年目となり、多くの修了者が本県の高校英語教育推進の担い手として活躍されています。一人ひとりが“自ら考え自ら行う”この神奈川独自の研修に、今後も多くの先生方がチャレンジされることを期待しています。

目　　次

「英語教育アドヴァンスト研修」とは　1
「教師が変わり，生徒が変わる授業」を目指してー授業改善プロジェクト　3

「聞くこと」にかかわる指導

リスニングの基礎力を育てるための日常的な指導　・・・・・・・・　5
音読を中心としたリスニングの指導　・・・・・・・・　9

「話すこと」にかかわる指導

聞き手に伝わる会話力を育てるスピーキング指導　・・・・・・・・　13
生徒が積極的に英語を話すスピーキング指導　・・・・・・・・　17
基礎的文法を使って会話を続ける力を育てる指導　・・・・・・・・　21

「読むこと」にかかわる指導

英文理解を深めるためのリーディング指導　・・・・・・・・　25
能動的な読解を促すリーディング指導の工夫　・・・・・・・・　29
初見の英語長文を速く的確に読む力を伸ばす指導　・・・・・・・・　33
自力での英文読解を促す指導　・・・・・・・・　37
読解タスクを工夫したリーディング指導　・・・・・・・・　41
自分の力で読解する力を育てるリーディング指導　・・・・・・・・　45

「書くこと」にかかわる指導

一貫性のある意見文を書く力を育てる指導　・・・・・・・・　49
まとまりと説得力のある文章を書くためのライティング指導　・・・・・・・・　53
統合的，段階的なライティング指導　・・・・・・・・　57
生徒の自信を高めながら継続的に行うライティング指導　・・・・・・・・　61

＊それぞれの実践レポートの内容については，言語活動の呼称などに関し，厳密な用語の統一はしていません。

英語教育アドヴァンスト研修とは

○ 英語教育アドヴァンスト研修のねらい

英語教育アドヴァンスト研修は，神奈川県で中核的役割を担う高等学校英語科の先生方に専門性の高い研修の機会を提供することを目指し，県教育委員会との連携のもと，国際言語文化アカデミアで平成23年度から開講されました。

集合研修9日（前期2日，夏季4日，後期3日），勤務校での授業研究1日（前期・後期各半日，研修スタッフ訪問）から構成される合計10日間のプログラムは，「英語教師の専門知識，英語による発信力」「授業研究，授業改善」「多文化共生，異文化コミュニケーション」を3つの大きな柱としています。

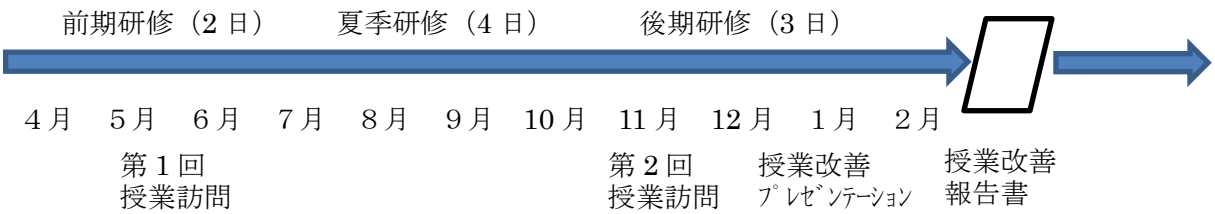
Objective 1	Objective 2	Objective 3
Expertise in English	Reflective Teaching	Multicultural Awareness
英語による発信力，および英語教育・言語習得理論の実践への活用力を磨く。	自らの授業を客観的に分析し，他教員の実践からも学びながら改善へと結びつける省察力を磨く。	英語教育において多文化共生，異文化ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝを扱うことの意義について意識を高める。

平成30年度までの8年間で，計142名の参加者が，高度な言語知識・技能およびそれらを基盤とした指導力を身につけ，仲間の教員との共同による英語教育推進に貢献すべく県内の各学校で活躍しています。

毎年プログラム内容に修正を加えながら，英語運用能力向上の試みをはじめ，省察による授業実践力向上，多文化共生・異文化コミュニケーションへの意識高揚など，研修内容の改善と充実に取り組んできました。

○ 研修成果を活かす場としての授業改善プロジェクト

研修内容は教室でのよりよい授業実践，生徒の英語力向上へと結びつかなければなりません。しかし，教師であれば授業改善の複雑さ・難しさは身をもって経験しています。そこでアドヴァンスト研修では，集合研修において多文化共生への意識，英語力，英語教育に関する専門知識を高めながら，勤務校では継続的に授業改善に取り組むことができるように授業改善プロジェクトを取り入れています。



○ 教師はどう変わるか

外国語の習得には長い年月と地道な努力を必要とします。外国語を教える技術の上達にも長い年月と地道な努力を必要とします。英語教師は日常の生徒指導に加え，自らの英語力の増進と指導技術の上達を同時に行わねばなりませんが，指導の結果，生徒の英語力が高まったと実感できると大きな励みになります。なにより，生徒たちが，英語の授業を通じてお互いに気持や考えを伝え合ったり，世界の人々の発信するメッセージを理解して感動たり，国内外で世界の人々と直接対話をしたりする様子を目の当たりにすることは教師にとりすばらしい経験です。

生徒の成長とともに，教師も成長し続けます。各報告の「教師の変化」の記載内容からは，研修参加者が一年間の授業改善を通じ，自らがどう変わったかを振り返る様子が伺えます。

- 生徒の実態やニーズを的確に把握することで，自分自身の授業の改善点を認識するようになった。
- 目標に向かって手だてを考え，手だての結果を振り返るというプロセスの重要性を再認識した。
- 同僚と話し合いながら，単元目標や指導案を考えるようになった。
- 生徒に英文の読み方を指導するにあたり，自らが英文をより深く読み込むようになった。
- スピーキング指導を通し，生徒と会話をし，生徒一人ひとりのことを知る機会が増えた。
- 生徒が能動的に学習活動を行うには，良質な問いかけが大切であることをあらためて実感した。
- 理論に裏打ちされた授業実践のあり方を学び，自分でもさらに研究・勉強を進めるようになった。
- アクション・リサーチを行うことで，より生徒の力を伸ばす実践がしたいという意識が高まった。

今後も，こうした「教師の変化」を体験し，同僚や生徒とその成果を共有することのできる英語教員が更に増えることを切に願っています。

○ 報告書作成の目的

本報告書の目的は 3 つあります。第一に，研修参加者が自らの授業改善の軌跡を記述しお互いの情報を共有することで今後の授業改善のための共同体づくりに役立てること。第二に，報告書の内容を他の英語科教員と共有することで，授業改善に関するアイディア創出に資すること。第三に，高等学校英語教育の課題やそれに対する現場の取組状況を公表することで，英語教育や教師教育にかかわる研究者の今後の研究に資することです。

お読みになる際は，以下の本報告書作成・編集方針をご理解いただけるようお願いいたします。

授業改善プロジェクト報告書作成・編集方針

1. 授業に参加している生徒の個性や尊厳を尊重し，生徒はみなそれぞれの可能性を持っているとの認識に立つ。
2. 学校や生徒の状況について，読者に参考となる情報を個人情報の保護に留意して記述する。
3. 実践報告については，理想論にとらわれず，現状認識に根ざした課題解決の軌跡を記述する。
4. 授業改善のプロセスやストーリーが読者にわかるように記述する。
5. データ処理や分析については，統計処理を含め言語教育研究で用いられる手法を積極的に取り入れ，授業改善の手だての効果を記述する。

本研修の実施および本報告書の作成にあたっては，過去の文献や研究成果，私たち研修担当者自身がお世話になった諸先生方から多くの知見をいただいていることを申し添えます。

「教師が変わり，生徒が変わる授業」を目指してー授業改善プロジェクト

○ 授業改善プロジェクトの流れ

授業改善プロジェクトは次のような手順で進められます。

１．自分の授業スタイルの振り返り

授業で行っている個々の活動の目的と効果，活動のつながりをあらためて考えることで，英語教師としての思いと実際の指導方法の整合性を確認します。これにより，自分の授業を客観的に分析するということを体験します。

２．授業における課題の発見

現在担当している科目の１つについて，どのような課題・問題があるか，教師の思いと授業の実情にどのような食い違いがあるかなどを，思いつく限り挙げてみます。

（例）英文読解に多くの時間を費やしてしまい，生徒に自己表現をあまりさせていない。
教科書英文の読解活動には取り組むが，初見の英文に対応できる読解力が育っていない。

３．改善すべき課題の確定

上で挙げた課題のうち，改善可能で優先順位の高いものを１つまたは２つ選びます。

４．生徒の現状把握

確定した課題に関連する生徒の学習態度や英語力・技能などを，質的・数量的に調査します。

（質的データの例）生徒の英語学習に関するコメント，教師による学習観察記録

（数量的データの例）標準テストの得点，推定語彙サイズ，発話語数

５．改善目標の設定

授業改善の目的とゴールを，「リサーチ・クエスチョン」および「改善の目安（数値目標）」として明確に言語化します。

６．目標達成のための手だての決定

目標を達成するために，授業でどのような指導を行うかを決めます。その際，それぞれの指導事項や言語活動にどのような目的や効果があるのかを明らかにしておきます。

（例）プレリーディング活動を工夫すれば，興味や背景知識が活性化され，主体的に読解に取り組むようになるだろう。

７．生徒の変化の検証と教師自身の振り返り

原則的に事前の現状把握で用いたものと同じ手法で，生徒の変化・向上を検証し，改善目標が達成されたかどうかを調べます。また同時に，この一連の取組を通して「生徒の見方」「授業のデザイン」「教材の扱い方」などについて，教師自身がどのように変化したかを省察します。

８．報告

同様の課題を抱える教師仲間との情報交換，勤務校や地区での情報提供に役立てるために，レポートを作成します。ここで再度，今回の授業改善の内容・手法を振り返るとともに，今後の課題について考察します（研修最終日に英語による口頭発表も行います）。

○ “Teacher as a Researcher” の意識とスキル

「自分が教わったように教える」「目の前の教材をあるがままにこなす」「はやりの言語活動を切り貼りする」というやり方では，うまくいかないことがよくあります。教師の直観や伝統的なやり方にもよさはありますが，生徒の質的・数量的ニーズを調べ，その客観的データに基づいて，生徒とゴールを共有しながら（変化をともなう）意思決定をしていくという意識やスキルは，プロである教師の成長に不可欠であると考えます。この授業改善プロジェクトに取り組んだ先生方が，仲間を増やしながら，よりよい授業を追求するプロ集団をつくり上げていくことを期待しています。

○ これまでの 8 年間のテーマ分類

この 8 年間で受講者の先生方が取り組んできた授業改善のテーマを分類すると，次の表のようになります。26 年度までは，「動機づけ・学習意欲」やスキルを支える言語知識である「語彙・文法」もテーマとして挙がっていますが，27 年度からは，「『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標」に基づいたスキルの習得を目指す授業実践の必要性を重視し，4 技能のいずれかをテーマ（＝授業のゴール）として選択することとしています。

	23 年度	24 年度	25 年度	26 年度	27 年度	28 年度	29 年度	30 年度
聞くこと	0	1	0	0	1	1	2	2
話すこと	2	1	2	7	9	4	7	3
読むこと	5	4	*1 4	*1 6	11	8	6	6
書くこと	4	4	3	3	4	2	0	4
動機づけ・学習意欲	6	3	1	5	－	－	－	－
語彙・文法	3	1	2	3	－	－	－	－
計	20	14	13	25	25	15	15	15

*1：「技能統合型」

リスニングの基礎力を育てるための日常的な指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学 年	3	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は 3 クラス 60 名（男子 28 名，女子 32 名）の生徒である。授業においては，投げかけた質問に対して半分ぐらいの生徒が自発的に答えてはいるものの，人前で発言・発表することや人とかかわることに対して苦手意識を持っている者も多い。また，日常的な学習習慣が身についている者も少なく，学習することに対して非常に消極的である。進路に関しては，4 割が大学・短大，3 割が専門学校進学を目指している状況である。ほとんどの生徒は AO 入試や指定校推薦での進学を考えており，一般受験をする生徒は極めて少ない。それ以外の 3 割の生徒は，就職や進学準備といった進路である。

解決すべき課題

「英語を話せるようになりたい」「英語を書けるようになりたい」という生徒が多いため，授業で簡単な英語によるコミュニケーションスキルを身につけさせたい。しかし，相手の話したことや簡単な説明を聞いて内容や要点を理解することが苦手な生徒が多い。そのため，基礎的な聞く力を身につけ，話す力や書く力の向上につなげていきたい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第１回リスニングテストテストの結果（６月実施：受験者数 49）

簡単な対話や説明を聞いて，内容を理解する力がどれくらい身についているのかを調べるために，英検３級のリスニング問題（第１部～第３部）30 問を出題した。

受験者数	平均点	標準偏差	最高点	最低点	6 割以上正解
49 人	16.3 点	5.93	30 点	7 点	17 人（35%）

＜分析と考察＞

1 問 1 点とした平均点は 16.3 点であった。合格点となる 6 割以上（18 点以上）正解した生徒は 17 人で，全体の 35%であり，半数以上の生徒が３級の合格点レベルに達していないことがわかった。

・英語学習に関するアンケート（６月実施：回答者数 55）

１．授業でどのような知識や力を伸ばしたいですか（3 つまで選択可）

聞く力	話す力	読む力	書く力	語彙の知識	文法の知識
28 人（51%）	28 人（51%）	16 人（29%）	29 人（53%）	15 人（27%）	22 人（40%）

２．ペアやグループで行う活動は好きですか

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
14 人（26%）	18 人（33%）	21 人（38%）	2 人（ 4%）

・英語に関するアンケート＜追加質問＞（６月実施：回答者数 58）

英語を聞く力に自信がありますか

自信がある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	まったくない
0 人（0%）	8 人（14%）	25 人（43%）	25 人（43%）

＜分析と考察＞

アンケートの結果，同じくらいの割合で「聞く力」「話す力」「書く力」を向上させたい生徒がいるということがわかった。追加で行ったアンケートにおいては，英語を聞く力に「自信がある」と答えた生徒がまったくおらず，「どちらかといえばある」と答えた生徒が 8 人（14%）しかいないということが判明した。また，ペアワークやグループワークなど人とかかわる活動が好きではない生徒が半数弱いることがわかった。このことから，協働的な学習を通して他者とかかわることに慣れていくような活動を取り入れることが必要だと考えた。

<u>リサーチ・クエスチョン</u>

簡単な英語で話される説明や会話を聞いて，その概要や要点を理解する力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・英検３級レベルのリスニング問題で正答率 6 割以上の生徒が全体の 7 割以上になる。
・アンケートで「英語を聞く力が伸びた」と回答する生徒が全体の 7 割以上になる。

<u>改善のための手だて</u>

○ 帯活動としてさまざまなリスニングタスクに取り組ませれば，英語を聞き取ることに慣れるだろう。
・洋楽の１フレーズや映画の１シーンのリスニングに取り組ませる。
・聞き取った英語のディクテーションと発音練習をさせる。

○ 教科書英文のキーワードやトピックを聞き取らせれば，プレリーディングとして目的をもったリスニングをさせることができるだろう。
・パラグラフごとに英文を聞かせて，聞いた内容をペアやグループで話し合わせ，全体で確認する。
・キーワードから英文の内容を予測させる。

○ 教科書の 1 文や副教材の会話文を使って，音変化やリズムを意識した音読練習をすれば，リスニングの基礎力を高めることに役立つだろう。
・消える音，つながる音，変化する音などについて説明し，リピーティングやシャドーイングによって練習させる。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回リスニングテストの結果（１２月実施：受験者数 49）

６月と同様に英検３級のリスニング問題（第１部～３部）30 問を使って聞く力の測定を行い，2 回の結果を比較した。

	受験者数	平均点	標準偏差	最高点	最低点	6 割以上正解
第１回	49 人	16.3 点	5.93	30 点	7 点	17 人（35%）
第２回	49 人	19.6 点	5.87	30 点	5 点	31 人（63%）

・問題タイプ別の平均点（各 10 点満点）

	第１部	第２部	第３部
第１回	6.1 点	4.8 点	5.4 点
第２回	6.6 点	6.7 点	6.3 点

＜分析と考察＞

目標には届かなかったものの，正答率 6 割（18 点）以上の生徒は 17 人（35%）から 31 人（63%）に増えた。６月の結果と比較すると，平均点も 16.3 点から 19.6 点に上がり，全体として聞く力の向上がうかがえた。この 2 回（６月・１２月）のデータについて t 検定を行ったところ，有意差が認められた（$p = 0.00 < 0.05$）。

また，第２部（対話を聞き，その対話に対する質問に答える問題）の平均点が 1.9 点と最も大きく上がったことから，音声指導としての会話文の音読練習に一定の効果があったと言ってよいだろう。

・英語学習に関するアンケート（１２月実施：回答者数 55）

１．聞く力が伸びたと思いますか

そう思う	どちらかといえば思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
15 人（27%）	29 人（53%）	8 人（15%）	3 人（6%）

２．以前に比べて英語を聞くことや発音することに自信を持っていますか

そう思う	どちらかといえば思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
6 人（11%）	29 人（53%）	14 人（26%）	6 人（11%）

３．ペアやグループの活動は楽しかったですか

そう思う	どちらかといえば思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
24 人（44%）	22 人（40%）	7 人（13%）	2 人（4%）

＜分析と考察＞

聞く力が伸びたかという質問に対して「（どちらかといえば）ある」と答えた生徒は 80%で，目標の 7 割を超えたことから，活動の効果があったといえるだろう。生徒からは伸びたと思う理由について，「公共交通機関などの身近で簡単な英語を聞き取れるようになったから」や「授業で何度もリス

ニングをする機会があり，英語を聞くことに慣れてきたから」というようなコメントがあった。また，64%の生徒が，英語を聞いたり発音したりすることに自信が持てており，自由記述にも「以前より発音のコツがわかってきた」など，音読練習の成果をうかがわせるコメントが見られた。さらに，ディクテーションについて，多くの生徒が「聞き取った英語を文字にすることで，自分の理解を確認することができた」として，その効果を実感できていた。ペアやグループでの活動についても，84%の生徒が楽しめたと回答しており，「コミュニケーションを取ることは苦手だが，考えを共有できたり，わからないところをみんなで解決したりできたのがよかった」といったコメントも見られた。さらに，生徒自身が「できるようになった」と達成感を持つことで，次にやりたいことやできるようになりたいことを教師に伝えるなど，授業に対する積極的な態度や学習意欲が見られるようになった。

教師の変化

テストやアンケートから生徒の実態やニーズを的確に把握することで，生徒が授業に求めていることや私自身の授業の改善点を認識することができた。授業全体およびそれぞれの活動に関して，「どんなことができるようになることを目指すのか」など目標や活動の目的を生徒に明確に説明し，生徒が充実感を持って授業に臨めるということを実感できた。

今後の課題（次の改善点など）

・高校３年生レベルの教科書英文では，単語や文構造自体が難しく，キーワードやトピックをなかなか聞き取れない者もいた。そのため，内容やトピックについて生徒が深く考えたり，推測したりしやすいようオーラルイントロダクションなどをより工夫する必要があるように感じた。
・発音練習などには熱心に取り組むものの，自己表現活動がうまくできない生徒が見られたため，書く／話す活動を統合的に位置づけた授業デザインの工夫が必要である。

まとめ・感想

アクション・リサーチを行うことで，私自身がつねに「どのようにしてここまで到達させるか」という目標を意識しながら授業を行うことができた。また，生徒の実態に応じて新たな活動を行ったり，適切な教材を与えたりすることで，生徒も素直に応えてくれ，学習動機や技能も向上するということを強く実感できた。それにより，生徒の進歩を感じられ，私自身の授業力も向上したと思う。

今回この研修に参加させていただけたことは，自分自身の授業を振り返り，見直すことを通じて，授業のあり方や教師としての役割についてあらためて考える非常によい機会になった。

実際に自分の授業を見て講評をいただき，他の先生方と授業について意見やアイディアを共有できたことは貴重な経験であった。今後もアカデミアの研修で学んだことを活かしながら，英語教師としてのさらなる資質・能力の向上を目指し，生徒とともに学び続ける教師でありたいと思う。

音読を中心としたリスニングの指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学 年	2	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は 3 クラス，計 118 名(男子 52 名，女子 66 名）の生徒である。ペアワークなどの授業内での活動には男女協力して取り組み，英語学習には意欲的である。進路については，ほとんどの生徒が進学を希望している。センター試験の受験率も非常に高く，大学入試対策の必要性を理解している生徒が多い。

解決すべき課題

英語学習には意欲的で，家庭学習の習慣が身についている生徒が多い。単語や表現についても積極的に学習しているが，それがリスニングスキルの向上に結びついていないように思われる。外国語教育におけるリスニング能力育成の重要性という観点からも，音声面を含めた単語・表現の素早い認識など，基本的なリスニングのトレーニングを積み重ねていく必要がある。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第１回　リスニングテスト（７月実施：受験者数 118）

副教材として使用しているセンター試験対策用リスニング問題集の問題（第２問，第３問 B：1 点×6 問）を使って生徒のリスニング力を調査した。

受験者数	平均得点率
118 人	51.7%

・リスニングの自律学習に関するアンケート調査（７月実施：回答者数 118）

＊質問：授業以外で学習として音声に触れる機会はありますか。

はい	いいえ
32 人(27.1%)	86 人(72.9%)

＊回答によるリスニングテスト平均得点率の違い

はいと答えた生徒の平均得点率	いいえと答えた生徒の平均得点率
61.7%	48.3%

＜分析と考察＞

センター試験の英語の全国平均点（総合点）は毎年 120 点前後で推移しており，平均得点率は 60%前後ということになる。生徒の進路希望を実現させるには，３年次終了までに 80%近くまで得点率を上

げる必要があり，これを今回のリスニングテストの結果（得点率 51.7%）と比較すると，指導の必要性をあらためて感じた。家庭学習としてリスニングに取り組んでいる生徒は少ないが，授業以外でもリスニング練習や音声を使った学習をしている生徒の方が，得点率が高いことがわかった。

リサーチ・クエスチョン

長めの対話やアナウンスを聞いて，その要点を的確に聞き取る力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：センター試験レベルのリスニングテストの平均得点率が 60%を超える。

改善のための手だて

○ 単語練習の際に，意味の暗記だけでなく，素早く英語と日本語を置き換えるようにすれば，英語を聞いて理解するスピードが速くなるだろう。

・スクリーンに映写したフラッシュカードを用してリズミカルな練習を心がける。
・毎週の単語テストに向けた練習を授業中も行い，意味の想起の速さや発音の正確さを確認する。
・単語練習がリスニング能力向上につながることを説明し，学習への動機づけを図る。

○ 本文のサイトトランスレーション練習をくり返し行えば，日本語の語順に並べ替えて訳す「返り読み」が矯正され，英語の語順で意味をとらえる習慣ができてくるだろう。

・授業では全訳は行わず，重要表現，新出文法，重要や単語，熟語を指摘するにとどめる。
・サイトトランスレーションは，内容理解の後に行い，段落ごとにペアで役割交代させる。
・英語力に自信がない生徒のために，板書やスライドによりその段落の概要を日本語で提示する。
・時間制限を設け，時間内に終わらせる努力を促すことにより，活動時間の均一化を図る。

○ サイトトランスレーションの際，日本語訳を言う側がワークシートを見ないで行えば，実際のリスニングに近い状態で練習でき，英語を聞いて瞬時に理解することに慣れるだろう。

・英文の難易度に応じ，(1) ゆっくり読み直す，(2) 日本語でヒントをだす，(3) ワークシートを少しだけ見せて Read and look up で読んでもらう，など相手に対する手助けのしかたを示す。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回　リスニングテスト（１１月実施：受験者数 117）

第１回（７月）と同様に，センター試験対策用リスニング問題集の問題（第２問，第３問 B：１点×6 問）を使って生徒のリスニング力を調査した。

受験者数	平均得点率
117	51.7%

＊正答数ごとの生徒の分布

	0 点	1 点	2 点	3 点	4 点	5 点	6 点
7 月	1 人	14 人	27 人	29 人	28 人	13 人	6 人
１１月	3 人	8 人	23 人	40 人	27 人	15 人	1 人

・リスニング指導に関するアンケート調査（１１月実施：回答数 117）

＊質問：授業中のリスニング問題演習や音読などのトレーニングに効果を感じましたか。

はい	いいえ
69 人(59.0%)	48 人(41.0%)

「はい」の理由　：他にリスニングを練習する機会がない，定期的に行うことで耳が慣れた。

「いいえ」の理由：音声が難しすぎて聞き取れない，得点が伸びなくて効果を実感できない。

＜分析と考察＞

平均得点率は第１回と同じで，改善の目安である 60%を超えるには至らなかった。伸び悩んだ原因としては，まず，練習で育成することを目指していた語彙の正確な理解や語彙想起の速度が，聞き取った内容について情報処理を行うのに必要なレベルに達していなかったということが考えられる。また，リスニングにおいて一般知識や想像力を働かせるいわゆる「トップダウン」型の処理を行うことができていないことも大きな要因かもしれない。正答数の分布の変化を見ると，0～2 点の生徒が減り，3 点の生徒が増えた。リスニングが苦手な生徒たちが少しでも得点を伸ばしたことは，今回の実践の成果と考えてよいかもしれない。授業中の問題演習や音読などのトレーニングについては，その効果を実感していた生徒は 6 割ほどにとどまった。特に問題演習に関しては，リスニングスキルを試すよい機会ととらえる意見がある一方で，なかなか正答できないことへのもどかしさもうかがえた。語彙処理能力だけでなく，リスニングのコツ（ストラテジー）を身につけさせる指導も必要であったとあらためて思った。

<u>教師の変化</u>

・これまで，生徒の英語力向上にとって効果的であると研修会や書籍等で言われていることを数多く取り入れることを優先してきたが，今回の実践を通し，生徒の現状を分析し，必要な手だてを考え，実行し，その結果に応じて，新たな手だてを考えるというサイクルで授業改善をするべきであるという意識に変わった。

・改善のための手だての効果を高めるために，同じ教科書を担当している同僚に協力を求めることで，教材研究についての議論が頻繁に行われるようになった。結果として，教師間の連携が深まり，授業内容や教材の共有の重要性をあらためて認識することができた。

・今まで行っていた音読活動やペアワークについて，その活動を取り入れる理由をつねに考え，生徒にも明示するようになった。

今後の課題（次の改善点など）

・フラッシュカードを使った単語練習をしたことで，生徒の語彙力は確実に向上した。毎週の単語テストの点数にも向上が見られた。しかし，キーワードを聞き取れただけでは，リスニング問題の正解を選べないこともある。長めの英文を正確に理解するために，聞き取ったキーワードをもとに思考し，点を線で結ぶように全体を理解する練習を取り入れる必要がある。

・授業で音読の時間を設けてはいるが，効率よく力を伸ばすには授業以外でのトレーニングも重要となってくる。授業以外に生徒が音読やリスニングのための学習やトレーニングをするように促すには，どのように授業内容や課題を工夫していくかが今後の課題である。

・フラッシュカードによる語彙の練習とサイトトランスレーションを通した英語の直聴直解活動がリスニング力を高めるという仮説のもとに実践を行ったが，一般知識や情報をつなぎ合わせて全体を理解する力など，語彙・文法の処理速度以外の要素がリスニング力に大きくかかわっていることを再認識する結果となった。今後は，さまざまなリスニングストラテジーの指導を明示的に行うことに加えて，教科書の題材に関連して，話す活動の前に書く活動を通してアイディアを整理したり，読んだ内容について話す活動をしたりするなどの技能統合型活動のなかで，生徒のリスニング力を総合的に向上させる必要がある。

まとめ・感想

自らの授業を，生徒のパフォーマンスの観察だけでなく，データやアンケートの解析から客観的に分析することで，改善へと結びつけることが以前よりも容易だと感じるようになった。また，同僚の実践から学ぶために，授業観察をし，教材研究の協議をすることで協力体制が構築できたことが大きな成果である。改善のための手だてが結果に結びつかなかったことは残念であったが，これを大きなチャンスとしてとらえ，手だてがなぜ生徒に対して効果がなかったのかを分析し，この研修で学んだ理論や，他校の授業実践例を参考にしながら，今回の授業改善のプロセスを見直し，改善がきちんとなされる手だてを考えて実践できるよう，日々の研さんを続けていこうと思う。

聞き手に伝わる会話力を育てるスピーキング指導

科目名	英語理解	学 年	2	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は２年次の２クラス 40 名（男子８名，女子 32 名）の生徒である。9 割以上が大学進学を目指している。ペアワークやグループワークにも積極的に参加し，全体的に授業に意欲的に取り組んでいる。

解決すべき課題

全般的に生徒の英語の能力は高いが，授業内でのペアでのやり取りにおいて，相手が理解できないような難しい単語を使ってしまう，また英単語が頭に浮かばない時には日本語を使ってしまう，という様子が見られた。さらに，ペアワークやグループワークの際，与えた時間を持て余してしまい，何を聞けばよいか，何を言えばよいか，わからずにとまどっている生徒もしばしば散見された。また，声量が不十分で聞き取りにくい，下を向いたまま原稿を読んでいる時間が長く，アイコンタクトをとっていない，という状況も見られた。これらのことから相手がわかりやすいように伝えたり，会話を続けたりすることに課題があると感じた。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第１回アンケート結果（８月実施：回答者数 37）

１．あなたは英語での会話や発表において，アイコンタクトをとることができていますか。
２．あなたは英語での会話や発表において，十分な声量で話すことができていますか。
３．あなたは英語での会話や発表において，発音やイントネーションに気をつけて発話することができていますか。
４．あなたは英語での会話や発表において，自分の言いたいことを難しい単語や表現ではなく，相手にわかりやすい単語を選択したり，言い換え（パラフレーズ）をしたりして伝えることができていますか。
５．あなたは英語での会話において，相手の発話に対して追加の質問やコメントをするなどして，会話を継続することができていますか。

	1.	2.	3.	4.	5.
つねにできている	2 (5.4%)	5 (13.5%)	5 (13.5%)	2 (5.4%)	0 (0.0%)
ときどきできている	21 (56.8%)	20 (54.1%)	19 (51.4%)	24 (64.9%)	16 (43.2%)
あまりできていない	14 (37.8%)	11 (29.7%)	12 (32.4%)	9 (24.3%)	19 (51.4%)
できていない	0 (0.0%)	1 (2.7%)	1 (2.7%)	2 (5.4%)	2 (5.4%)

＜分析と考察＞

１～４については，「つねに／ときどきできている」と答えた生徒の割合が 62.2～70.3%と，高い数値を示しているが，「(あまり）できていない」と答えた生徒が，3 割程度いることから，改善の余地があると考えられる。５については，6 割近くの生徒が「(あまり）できていない」と回答しており，即興的に会話を継続，発展させる力を育てる指導が必要であるとあらためて感じた。

<u>リサーチ・クエスチョン</u>

聞き手に伝わりやすい工夫をしながら英語で発表や会話ができる力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安： アンケートによる自己評価の全項目で「つねに／ときどきできている」と回答する生徒が全体の 8 割以上になる。

<u>改善のための手だて</u>

○ 会話を続けるタスクを与えれば，適切な質問や情報を追加して話すようになり，会話を発展させることができるようになるだろう。

・5W3H（when / where / who / why / what / how / how much / how many）を使った質問によって会話を深めるよう指導する。

○ 自分の発話を振り返る活動を与え，聞き手の理解度や会話の流れを意識して話すよう指導すれば，自分の課題に気づくようになり，主体的に話す力を伸ばすことやより円滑に会話をすることができるようになるだろう。

・毎時間の最後に，ルーブリック（次ページ）を使ってペアワーク，グループワークの自己評価（振り返り）をさせる。

	わかりやすさ(Clarity)	デリバリー（Delivery）
A	意見を述べる際に，相手が十分に理解することができる語彙，表現で伝えることができた。	アイコンタクト，声量，イントネーション，発音が適切で，キーワードを強調するなど，相手の理解を促す工夫をしながら，伝えることができた。
B	意見を述べる際に，相手が理解することができない語彙や表現が１つ以上あった。	アイコンタクト，声量，イントネーション，発音のいずれか１つにおいて不十分であった。
C	意見を述べる際に，相手が理解することができない語彙や表現が２つ以上あった。	アイコンタクト，声量，イントネーション，発音の２つ以上の項目において不十分であった。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回アンケート結果（12 月実施：回答者数 37）

１．あなたは英語での会話や発表において，アイコンタクトをとることができていますか。
２．あなたは英語での会話や発表において，十分な声量で話すことができていますか。
３．あなたは英語での会話や発表において，発音やイントネーションに気をつけて発話することができていますか。
４．あなたは英語での会話や発表において，自分の言いたいことを難しい単語や表現ではなく，相手に伝わりやすい単語を 選択したり，言い換え（パラフレーズ）をしたりして伝えることができていますか。
５．あなたは英語での会話において，相手の発話に対して追加の質問やコメントをするなどして，会話を継続することができていますか。

	１．	２．	３．	４．	５．
つねにできている	2 (5.4%)	2 (5.4%)	10 (27.0%)	2 (5.4%)	0 (0.0%)
ときどきできている	25 (67.6%)	25 (67.6%)	19 (51.4%)	27 (73.0%)	17 (45.9%)
あまりできていない	10 (27.0%)	10 (27.0%)	8 (21.6%)	8 (21.6%)	20 (54.1%)
できていない	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

＜分析と考察＞

１～５の各項目で「つねに／ときどきできている」と回答した生徒の割合はそれぞれ，73.0%（前回 60.2%），73.0%（前回 67.6%），78.4%（前回 64.9%），78.4%（前回 70.3%），45.9%（前回 43.2%）となり，いずれも増えてはいるが，改善の目安とした８割には届かなかった。１～４については，７割を超えて８割近くまで伸びていることから，自己評価ルーブリックによる意識づけがある程度有効であったと思われる。一方，項目５については，指導し，練習はさせたものの，どれくらいできているか生徒が振り返る機会がなく，課題意識を持たせることができなかったことが伸び悩みの要因であろう。この項目についても何らかの形で生徒自身にモニターさせる必要がある。

教師の変化

これまで私は，生徒の学習状況を肌感覚で理解しようとすることが多かったが，きちんとアンケートを実施し，数値化することによって，より正確に生徒のニーズを把握することができるようになった。数値の結果を見ると，想定していたことと現実との違いに驚くとともに，これまでの理解がいかに感覚的過ぎたものであったかを痛感させられた。より正確に生徒を把握するということは，よりよい改善策を考えることにつながり，結果として生徒の力を伸ばしていくことができるので，今後の授業でもアンケートを実施し，より正確な学習状況の把握に努めていきたい。当初，この授業改善に取り組むにあたり，概ね高い英語力を持っている生徒たちに対し，改善する余地があるのだろうか，という不安の気持ちが大きかった。しかし，生徒の活動状況をつぶさに観察し，アンケート調査によってさらに課題を明確にしたうえできちんと改善策を講じることで，向上やさらなる改善の必要性が確認でき，自信をもって授業ができるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

今回作成した自己評価ルーブリックについては，できあがってから，生徒に定着するまでにかなり時間がかかってしまったので，もし早くから使い始められていれば，数値結果が変わっていた可能性も考えられる。今後は，まず生徒の現状分析に基づく指導計画を年度当初にしっかりと立て，一定のタイミングで振り返りをし，この方向性でよいのか，あるいは微調整をするのか，を検討する機会をきちんと設け，よりよい改善につなげていきたい。

まとめ・感想

今回のアクション・リサーチではスピーキング指導の改善に挑戦をした。すでにある程度のスピーキング力を持っている生徒たちを改善していくことは困難に思えたが，アンケート調査を通じて，生徒の実態が明らかとなり，まだまだ伸びしろがたくさんあることに気づくことができた。ルーブリック作成がなかなかうまくいかず，成果を出せるか，不安になったこともあった。結果として目安の８割には届かなかったが，目標を設定して手だてを講じ，改善につなげられたことは大きな自信となった。またこの授業改善にあたり，アドヴァンスト研修で学んだことに基づいて授業の組立を見直すことができたことも大きな成果の一つである。本研修を通じて，ようやく私は英語教師として本当の意味でのスタートラインに立つことができたように思う。これを機に，来年度以降も授業改善に努め，さらに生徒たちの力を引き出し，伸ばしていきたいと思う。

生徒が積極的に英語を話すスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学 年	3	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象クラスは 2 クラス，合計 58 名（男子 18 名，女子 40 名）である。ほとんどの生徒が推薦入試での 4 年制大学，短期大学，専門学校への進学を考えており，授業には積極的に取り組む生徒が多い。

解決すべき課題

多くの生徒が英語に対する苦手意識を持っており，個々の能力には差がある。音読練習では積極的に声を出して取り組むことができるが，英語で行うコミュニケーション活動ではすぐに日本語を使ってしまう傾向にある。自信を持って英語でやり取りできる能力と積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を育む必要がある。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・事前アンケート調査①（5 月）：英語の好き嫌い／特に伸ばしたいもの

英語が「(どちらかというと）好き」と答えた生徒は，全体の 32%であった。また，英語 4 技能のなかで，「スピーキングを特に伸ばしたい」と答えた生徒は全体の 65%と最も多かった。このことから，「スピーキングの力を伸ばしたい」というニーズを持っている生徒が多いということがわかった。

・事前アンケート調査②（5 月）：スピーキングに対する意識

英語で話すことに対して，「(どちらかといえば）抵抗感がある」と答えた生徒は 69%であった。また，その理由として，「英語の文をどのように組み立てたらよいのかわからない／思いつかない」と答えた生徒が 65%と最も多かった。加えて，「英語が話せるようになれば，英語が好きになると思うか」という項目では，「(どちらかといえば）なると思う」と答えた生徒がほとんどだった（89%)。

多くの生徒がスピーキング能力向上を望んでいるが，英語を話すことに対して抵抗感を感じている。これまでの授業では，単元を学び終えるタイミングでしかスピーキング活動を行っていなかった。話すことへの慣れに結びつくのに十分な経験を与えてこなかったことが原因と考えられる。より継続的，段階的なスピーキング指導を通して，生徒に英語を話すための自信を持たせることが必要だと感じた。

リサーチ・クエスチョン

身近な話題について自信を持って英語で会話できるようになるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・「会話力」「やり取り力」を評価するルーブリックでA～Cの3段階中Aの評価をとる生徒が7割を以上になる。

・「英語を話すことに（どちらかといえば）抵抗感がない」と感じる生徒が 7 割以上になる。

改善のための手だて

○ 場面設定をした英会話の練習をすれば，英語でやり取りすることに慣れ，自信が高まるだろう。

・道案内などの身近にありそうな場面で使える表現を指導する。

・フレーム化した会話例にあてはめた会話練習を行う。

○ 自分の発話について振り返る活動を与えれば，発話の質が高まるだろう。

・自分が話した英文をリアクションペーパーで振り返るようにする。

・リアクションペーパーや活動時間の机間指導によって生徒の誤りを指導し，全体にもフィードバックする。

○ 質問のしかたを明示的に指導し，練習すれば，会話を継続させることに役立つだろう。

・疑問文の作り方を指導し，ドリルなどで練習する。

・疑問文の使いどころを理解できる練習をする（「つっこみ力」の養成）。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・会話活動のルーブリック評価（５月，１２月）

手だて実施の前後に次のようなルーブリックを用いた相互評価を実施し，結果を比較した。

（評価対象：58 名）（※質問力の評価は１２月のみ実施）

	会話力	質問力	やり取り力
A （3 点）	SV がある英語で話すことができる。 3 文以上の英語を話すことができる。	相手の応答に対して，追加情報を聞き出す質問を 2 つ以上できる。	声の大きさや，明瞭さが適切であり，アイコンタクトや聞き返しなど十分に用いながら，会話している。
B （2 点）	SV がある英語で話すことができる。 1～2 文の英語を話すことができる。	相手の応答に対して，追加情報を聞き出す質問を 1 つできる。	声の大きさ，明瞭さが適切であり，アイコンタクトや聞き返しなどを少し用いながら，会話している。
C （1 点）	文ではないが，単語を並べて話すことができる。	追加情報を聞き出す質問をできない。	声の大きさや明瞭さが適切ではなく，アイコンタクトや聞き返しなども用いていない。

生徒同士の英会話テスト結果の比較（58 名）

	会話力		質問力	やり取り力	
	５月	１２月	１２月	５月	１２月
A	23 人（40%）	46 人（79%）	49 人（84%）	40 人（69%）	49 人（84%）
B	32 人（55%）	9 人（16%）	8 人（14%）	18 人（31%）	9 人（16%）
C	3 人（ 5%）	3 人（ 5%）	1 人（ 2%）	0 人（ 0%）	0 人（ 0%）

・「会話力」「質問力」「やり取り力」の評価の推移（５月～１２月）

評価ルーブリックで A～C の 3 段階中 A を取った生徒は，「会話力」の項目では５月時点の 40%から 79%まで，「やり取り力」の項目では 69%から 84%まで増え，目標である 70%に達することができた。さらに，事後テストで評価に加えた「質問力」でも，80%を超える生徒が A 評価であり，質問することによって会話をつなげる力も向上させることができたと考える。以上のことより，すべての項目において生徒が力を伸ばしたといえる。一方で，事前事後ともに「会話力」において 3 人が C 評価となっているが，これらは同じ生徒であった。基礎的な文法力・語彙力の不足から伸び悩んでいると推察する。

・事後アンケート調査（１２月）（回答数 58 名）

英語を「話すこと」に対して，抵抗感はありますか。

ない／どちらかといえばない		ある／どちらかといえばある	
５月	１２月	５月	１２月
17 人（31%）	39 人（71%）	39 人（69%）	16 人（29%）

「英語に対する抵抗感」に関するアンケート項目では，「抵抗感が（どちらかといえば）ない)」と答えた生徒が 31%から 71%まで大幅に増え，目標を達成することができた。

会話活動のルーブリック評価の 2 項目（会話力・やり取り力），アンケート調査 1 項目（抵抗感）について，事前・事後の結果を検定（Wilcoxon の符号付順位検定）にかけたところ，統計学的に有意な向上が認められた（「会話力」$p=0.00<0.05$，「やり取り力」$p=0.03<0.05$，「抵抗感」$p=0.00<0.05$）。

＜考察＞

スピーキングテストの評価，生徒の英語を話すことへの意識ともに，全項目において改善の目安に達することができ，全体的に今回の授業改善の取組は成功したといえるだろう。毎時間の授業に帯活動として継続したスピーキング指導を取り入れることで，５月から一貫した指導を行うことができた。その結果，生徒が英語を話すことに慣れ，積極的に英語で会話しようとする生徒が増えたことが今回の成功に結びついたと考える。また，事前アンケート調査からもわかるように，スピーキング力向上に意欲的な生徒が多かったので，スピーキング指導を取り入れることで，今まで以上に活気のある授業が可能になったのではないかと考える。

教師の変化

・生徒のニーズを事前アンケート調査で確認することで，生徒の学習意欲を効率的に向上させる授業作りを行うことができた。
・ルーブリックなどを作成し，到達目標を明確にしたことで，その到達目標に向けて，継続的で一貫した指導をすることができた。
・アクション・リサーチを行うことで，客観的に自分の授業を振り返ることができ，より生徒の力を伸ばすことができるように授業改善を行いたいという意識が高まった。

今後の課題（次の改善点など）

今回の授業改善では，スピーキングの流暢さと英語を話すことへの自信を，大幅に高めることができたが，生徒が話す英語の文法的な正確性については厳密に評価できていない。テストの様子から判断するに，質問には的確に答えられるが，人称や時制などは正確でない生徒がまだ多くいた。また，以前と変わらず英語を話すことに抵抗感を感じている生徒のなかでは，「どの単語を使えばいいかわからない」と答えた生徒が多かった。語彙の使い方を含めた基本的な英語の文構造の理解ができていないことが，会話力の向上を阻害していると推察された。今後は，文法的な正確性の向上と表現のバリエーションを増やす語彙の習得を目標に指導していきたい。

まとめ・感想

今回の研修は初任者の時から参加を望んでいたこともあり，受講できたことに大きな喜びを感じている。毎回の講習では，仲間から刺激を受けながら新たな知識を学ぶことができ，授業改善への意欲がより高まった。今回の対象生徒は３年生であったが，高校３年間の最後に「英語を話せるようになった」，「英語を好きになれた」と授業に充実感を感じている声を聞くことができ，私も達成感を感じている。ここで学んだことは私の教師としての財産になると感じている。長く続く教師人生のなかで幾度となく困難に直面するであろうが，これからも生徒とかかわりながら学び，成長し続ける教師でありたい。

“A small change can make a big difference,” “Step out of your comfortable zone.”この二つのことばが今も胸に響いている。

授業改善にあたって参考にした資料等

ジャパンタイムズ(編). (2015).『英会話ぴったりフレーズ 3000』ジャパンタイムズ
ESL Grammar Conversation Questions
https://www.eslconversationquestions.com/english-conversation-questions/grammar/

基礎的文法を使って会話を続ける力を育てる指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅰ	学 年	1	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は１クラス 34 名（男子９名，女子 25 名）の生徒である。学習態度は全体的に受け身であるが，落ち着いて学習に取り組み，英語が好きな生徒も多い。学年全体の８割以上が大学・短大・専門学校に進学し，そのうち約９割が AO 入試や指定校・公募制推薦入試によるものである。

解決すべき課題

・英語で会話することに慣れていないため自信がないように見える。
・基本的な文法知識が定着していないためか，英文の作り方がわからないようである。
・教師の説明を聞いたり，読解問題やリスニング問題を解いたりすることにはよく取り組めているが，話したり書いたりするアウトプット活動になると，積極的な姿勢が見られなくなる。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・英語学習に関するアンケート（７月実施：回答数 34）

１．あなたは英語の学習が好きですか？

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
9 人(26.6%)	13 人(38.2%)	6 人(17.6%)	6 人(17.6%)

２．この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか。(2 つまで回答可)

聞く力	話す力	読む力	書く力	単語や熟語	文法
15 人 (44.1%)	23 人 (67.5%)	7 人 (20.6%)	5 人 (14.7%)	6 人 (17.5%)	7 人 (20.6%)

＜分析と考察＞

英語を話すことには消極的な生徒が多い印象だったが，アンケートから「話す力」を伸ばしたい生徒が７割近くいることがわかった。また，多くの生徒の自由記述から，日常的な会話ができるようになりたいという思いがうかがえた。そこで，授業内で生徒とアンケートの結果を話し合い，今年度の授業改善のテーマをスピーキングにすることにした。

・第１回スピーキングテスト（７月実施：受験者数 34）

生徒の話す力を把握するために，身近な話題についての会話テスト（2 人 1 組）を行った。
テスト内容：夏休みの予定に関する会話（2 分程度）
評 価 方 法：自作ルーブリックによる分析的評価

	流暢さ	正確さ	会話を続ける力
A	長い沈黙や言い直しがほとんどなく，スムーズに話すことができる。	概ね正確な文の形で発話している。	会話のなかで，適切な回答と 2 つ以上の質問をすることができる。
B	沈黙や言い直しがあるが，理解に支障がない。	多少誤りが見られるが，文の形で発話しようとしている。	会話のなかで，適切な回答と 1 つの質問をすることができる。
C	長い沈黙や言い直しが多く，理解に支障がある。	単語やフレーズを並べただけで，文の形で発話していない。	適切な回答または質問をすることができない。

結果：

	流暢さ	正確さ	会話を続ける力
A	1 人(2.9%)	1 人(2.9%)	1 人(2.9%)
B	10 人(29.4%)	8 人(23.5%)	19 人(55.9%)
C	23 人(67.7%)	25 人(73.6%)	14 人(41.2%)

試験後アンケート（回答数 34）

1．自分の夏休みの計画を話すことができましたか。

そう思う	まあまあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
1 人(2.9%)	13 人(38.2%)	13 人(38.2%)	7 人(20.6%)

2．夏休みの計画について，会話を続けることができましたか。

そう思う	まあまあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
0 人(0.0%)	9 人(26.5%)	13 人(38.2%)	12 人(35.3%)

＜分析と考察＞

流暢さおよび正確さの項目において，約 7 割の生徒が C 評価となった。特に正確さにおいては，SV の形で話そうとした B 評価の生徒であっても “I’m go to Yamanashi.” “I go Disneyland.” 等の誤りが多くみられた。また，一言で予定を言い終え，相手も質問が思いつかないまま沈黙が続くペアがほとんどであった。相手に質問をして会話を続けることを目標として伝えてあったため，約 6 割の生徒が 1 つは質問をすることができたが，沈黙の末に “Why?” “Where?” “Who?” 等の一言を発するのがやっとで，想像していた以上に指導の必要性を強く感じた。テスト後のアンケートでは 7 割以上の生徒が会話を続けることができなかったと振り返り，自由記述欄からは「もっと話せるようになりたい」という前向きな姿勢がうかがえた。以上の結果から，沈黙を減らし，自信をもって英語でのことばのキャッチボールを続けようとする態度を育てることを目標にすることにした。

<u>リサーチ・クエスチョン</u>

身近な話題について英語で会話を続けられるようにするには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・評価ルーブリックの各項目で B 評価以上の生徒が 7 割を超える。

・アンケートで「会話を続けることができた」と感じる生徒が全体の 7 割を超える。

改善のための手だて

○ 日常的に会話練習を継続すれば，話すことに慣れ，抵抗がなくなるだろう。
　・毎時の授業内で，その日のトピックについて会話する時間を設ける。
　・ペアを替えて会話練習をくり返す。
○ 会話のフレームを使って練習すれば，場面にふさわしい表現や会話の流れが身につくだろう。
　・会話の始め方，終わり方，相づちなどを含むフレームをくり返し使わせる。
　・既習の文法事項を入れ込むことで，新たな言語知識を言語使用へつなげる。
○ 質問のしかたを練習し，その結果を振り返り，記録させれば，会話を続けることへの自信と意欲が高まるだろう。
　・会話において自身が質問した数を記録させる。
　・相手への follow-up question をする練習を積ませる。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・段階的なプランニングの指導による発話量の変化

計画通りに指導を行うなかで，多くの生徒から「話す内容が思い浮かばない」という声があった。そこで，内容を整理して話し，相手の話を理解して質問できるようになるための追加指導として，まず１ターンの発話ごとにプランニングをしながら会話するという練習をさせた。その後で相手を変えてプランニングなしで会話させ，最終的にはそれらの活動が頭のなかでできることを目指した。その結果，練習中の発話量は飛躍的に伸びた。

手順：

生徒 A：（マッピングで準備　→）発話 生徒 B：（A の発話内容をメモ→）質問 生徒 A：（B の質問内容をメモ→）応答	⇒	プランニングなしの会話練習

・第２回スピーキングテスト（１２月実施：受験者数 33）

テスト内容：冬休みの予定に関する会話（2 分程度）＊実施方法・評価方法は第１回と同じ

結果：

	流暢さ	正確さ	会話を続ける力
A	1 人(3.0%)	1 人(3.0%)	3 人(9.1%)
B	31 人(94.0%)	22 人(66.7%)	28 人(84.8%)
C	1 人(3.0%)	10 人(30.3%)	2 人(6.1%)

試験後アンケート（回答数 33）

１．自分の冬休みの計画を話すことができましたか。

そう思う	まあまあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
7 人(21.2%)	18 人(54.6%)	7 人(21.2%)	1 人(3.0%)

２．冬休みの計画について，会話を続けることができましたか。

そう思う	まあまあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
5 人(15.2%)	21 人(63.6%)	5 人(15.2%)	2 人(6.0%)

＜分析と考察＞

スピーキングテストで各項目のルーブリック評価がB以上となった生徒の割合は,「流暢さ」で97.0%,「会話を続ける力」で93.9%,「正確さ」では69.7%になり，アンケートでも7～8割以上の生徒が，テーマについて「話せた」「会話を続けられた」と答えている。このことから，一連の手だてに効果があったと言ってよいだろう。「正確さ」ではわずかに目標の7割に届かなかったが，第1回の26.4%から大きな進歩があったと思う。ルーブリック評価について，事前，事後のデータがそろっている32名分について，検定（Wilcoxon の符号付順位検定）にかけたところ，すべての評価項目について，統計学的にも有意な向上が認められた（$p = 0.00 < 0.05$）。

教師の変化

・スピーキングに焦点をあてることで, 生徒と会話する機会, 生徒一人ひとりのことを知る機会が増え, 年間を通してお互いに表情がやわらかくなっていくのを感じた。生徒との関係を築くうえでも，スピーキング指導の重要性をあらためて感じた。
・目標と評価規準を明確にして指導を進めることで，それらに沿った活動を計画するようになり，授業の組み立て方が整理された。また，スピーキングのみならずすべての活動において同じように計画するよう，つねに心に留めるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

・生徒の発話の「正確さ」については，まだまだ文法上の誤りが多いことに課題を感じたため，来年度は年度当初から，学習状況を確認しながら，基礎的文法の指導・発話練習を積み重ねたい。
・今回の授業改善では「発音」を明示的な目標にしていなかったが，英語らしい発音，リズムの丁寧な指導の必要性を強く感じた。
・中学文法が定着していない状態で，教科書のレッスンの内容をもとに会話をさせることの難しさを感じたため，教科書だけに依存しない4技能の指導計画を担当者全員で考えたい。

まとめ・感想

授業づくりについてつねに考えていた1年だった。研修で多くのことを学ぶことができ，自分の授業で試すことができたこと，そのなかから自分に合った指導法を見つけていけたことは，本当に自分の財産になったと思う。教材研究に取り組み，指導・振り返り・改善のくり返しで生徒の伸びを少しずつ実感するうちに，3年間を通して着実に丁寧な指導を積み重ねたいという思いを強く持った。だからこそ教師間で共通の認識をもち，担当教員が変わっても3年間を見通した指導を保障することが求められるのだと思う。現在次年度に向けて，4月当初に英語科で指導目標，指導内容が共有できるよう少しずつ準備を始めている。日々さまざまな事情に追われ, 迷惑をかけながらも臨ませてもらった研修だったが, 素晴らしい指導教員たちや仲間に恵まれ，1年間有意義な学びの場に参加できたことに感謝したい。

授業改善にあたって参考にした資料等

佐藤一嘉(編著). (2014).『英語授業を変えるパフォーマンス・テスト 中学3年』明治図書

英文理解を深めるためのリーディング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅰ	学 年	1	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は３クラス 121 名（男子 68 名，女子 53 名）の生徒である。どのクラスも明るく活発で，英語の学習意欲は高い。授業への取組状況も良好で，ペアワークやグループワークにも積極的に取り組む。ほとんどの生徒が４年制大学への進学を希望しており，なかには難関大学への進学を目指す生徒もいる。

解決すべき課題

中学校までの学習事項をよく理解しているが，まとまった英文を読むことに慣れていない。また，英文１文１文を理解することに注意が向けられ，断片的な内容理解しかできていない。話の流れや論理展開をとらえ，英文全体の概要や各段落の要点を把握するスキルを身につけてほしいと考える。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第１回 英文理解に関するアンケート（６月実施：回答者数 121）

１．ある程度の長さの英文を読んで理解することに自信がありますか。

ある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	ない
18 人(14.9%)	50 人(41.3%)	37 人(30.6%)	16 人(13.2%)

２．英語での口頭要約が英文理解に役立つと思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
47 人(38.8%)	50 人(41.3%)	16 人(13.2%)	8 人(6.6%)

３．英語で要約を書くことが英文理解に役立つと思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
56 人(46.3%)	53 人(43.8%)	8 人(6.6%)	4 人(3.3%)

＜分析と考察＞

ある程度の長さの英文を読んで理解することに（どちらかといえば）自信があると答えた生徒の割合が 56.2%であることが確認できた。要約活動が英文理解に役立つと感じている生徒が８割以上いることがわかり，授業に取り入れることで，英文理解の深化につながると考えた。

・第１回 英文読解テスト（６月実施：受験者数 120）

英検準２級，２級の長文問題を用いて，既存の要点問題４問と自作の概要問題１問を出題した。

	平均点	標準偏差	最高点	最低点	7 割以上正解
準２級	3.7 点	0.94	5 点	1 点	81 人(67.5%)
２級	2.6 点	1.22	5 点	0 点	32 人(26.7%)

概要問題（第５問）の正答率

準２級	２級
25.8%	39.2%

テスト実施直後に,初見の英文の読解問題を解いた際の自分の弱点について３つの度合でたずねた。

	大きな弱点	中程度の弱点	多少の弱点
知らない単語や表現がある	83.3%	14.2%	2.5%
最後まで集中力が続かない	36.7%	22.5%	40.8%
読むスピードが遅い	24.2%	40.0%	35.8%
英文全体の大意をとらえるのが苦手	23.3%	41.7%	35.0%
段落ごとの要点を把握するのが苦手	19.2%	48.3%	32.5%
論理の流れをとらえるのが苦手	13.3%	47.5%	39.2%

＜分析と考察＞

概要問題はどちらも低い正答率（25.8%・39.2%）で，英文全体の概要をとらえるのが苦手であることが再確認できた。「知らない単語や表現がある」ことが大きな弱点であると感じている生徒の割合が 83.3%にのぼった。段落ごとの要点や論理の流れ，英文の大意をとらえることの重要性は意識しつつ，語彙力不足が読解の大きな妨げと感じている様子がわかる。

リサーチ・クエスチョン

初見の英文について，パッセージの概要やパラグラフの要点を的確に読み取る力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検２級の読解問題の正答率が 7 割以上になる生徒が全体の 6 割以上になる。

改善のための手だて

○ 英文の概要・要点をとらえるタスクを工夫して，継続的に取り組ませれば，より的確に内容理解ができるようになるだろう。

・教科書レッスンの各パートの概要について，タイトルまたは英文 1 文で表現させる。
・各パラグラフの要点をとらえる Q&A に取り組ませる。
・グラフィックオーガナイザーを用いて，各パラグラフの要点を視覚的に整理させる。

○ 教科書レッスンのパートごとに要約活動を与えれば，話の流れや論理展開を再確認できるようになるだろう。

・制限時間内に英語の口頭要約を相手に伝える練習をさせる。
・英語の口頭要約をさせた後，英文 5 文以内の要約文を書かせる。
・ディスコースマーカーや各パラグラフからのキーワードを利用した要約作成の指導をする。

○ 初見の英文を読む機会を与えれば，まとまった英文を読むことに慣れ，英文読解に対する自信が高まるだろう。

・さまざまなトピックの英文を与え，問題演習をさせる。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回 英文理解に関するアンケート（１２月実施：回答者数 119）

１．ある程度の長さの英文を読んで理解することに自信がありますか。

ある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	ない
11 人(9.2%)	60 人(50.4%)	40 人(33.6%)	8 人(6.7%)

２．英語での口頭要約が英文理解に役立つと思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
29 人(24.4%)	55 人(46.2%)	28 人(23.5%)	7 人(5.9%)

３．英語で要約を書くことが英文理解に役立つと思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
39 人(32.8%)	56 人(47.1%)	19 人(16.0%)	5 人(4.2%)

＜分析と考察＞

ある程度の長さの英文を読んで理解することに（どちらかといえば）自信があると答えた生徒の割合が若干上がり，59.6%であった。まとまった英文を読む機会が増えたが，教科書の英文がだんだん難しくなり，自信を失ってしまっている生徒が少なからずいると推測される。一方，要約活動が英文理解に役立つと感じている生徒の割合がどちらも１割程度減った。これはこれらの活動が，英文理解よりも英語を話す力や書く力を伸ばすために役立つと感じている生徒がいるためと考えられる。要約活動が要点や論理構造の理解により役立つように工夫する必要があると感じた。

・第２回 英文読解テスト（１２月実施：受験者数 115）

前回と同じ条件で，英検準２級，２級の異なる長文問題を用いて実施した。

	平均点	標準偏差	最高点	最低点	7 割以上正解
準２級	4.1 点	0.82	5 点	2 点	91 人(79.1%)
２級	3.6 点	1.24	5 点	1 点	69 人(60.0%)

概要問題（第５問）の正答率

準２級	２級
62.6%	61.7%

前回と同様に，テスト実施直後に初見の英文の読解問題を解いた際の自分の弱点についてたずねた。

	大きな弱点	中程度の弱点	多少の弱点
知らない単語や表現がある	64.3%	23.5%	12.2%
最後まで集中力が続かない	23.5%	28.7%	47.8%
読むスピードが遅い	20.9%	37.4%	41.7%

英文全体の大意をとらえるのが苦手	19.1%	42.6%	38.3%
段落ごとの要点を把握するのが苦手	12.2%	46.1%	41.7%
論理の流れをとらえるのが苦手	9.6%	45.2%	45.2%

＜分析と考察＞

概要問題の正答率（62.6%・61.7%）が前回よりどちらも上がり，英文全体の概要をとらえることができるようになったことは大きな成果である。初見の英文を読んだ際の自分の弱点については，どの項目においても若干の改善が見られた。要因として，以前より語彙の知識が増えたのに加え，段落ごとの要点をとらえながら，英文全体を理解しようと意識する生徒が多くなったことと，まとまった英文を抵抗なく読めるようになったことが考えられる。実際，制限時間よりも 5 分以上残して解答を終わらせる生徒が多く見られたことは驚きである。

教師の変化

何よりもまず，教材研究として英文をより深く読むようになった。読解タスクを工夫し，要約活動を充実させるために，授業準備により時間をかけるようになった。また，研修で学んだ活動を授業で実践していくことで，授業が活気づき，生徒の活動に変化が見られた。そして，生徒とのやりとりを通して一緒に授業づくりをしていくことが楽しいと感じるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

・英文読解に効果的な語彙指導をする必要がある。未知語の意味を推測させる活動だけでなく，語彙の定着を図る活動も工夫していきたい。
・アウトプット活動をさらに充実させる必要がある。内容理解を深めるための要約活動から，相手に自分のことばで内容を適切に伝える活動や自分の意見や考えを述べたり書いたりする活動につなげていきたい。
・3 年後の生徒の姿を見据え，限られた時間のなかで，４技能の指導をどのようにバランスよく授業に取り入れていくかを検討していく必要がある。

まとめ・感想

今の自分の指導は生徒の英語力を本当に伸ばすことができているのか，そして，目の前にいる生徒にとって最善の指導は何であるのかと疑問を抱き，日々悩んでいたので，今回の取組は，自分の授業を見つめ直す大きなきっかけとなった。毎回参加した研修はとても新鮮で，新しい発見や気づきがいくつもあり，授業改善をしていくうえでのさまざまなアイディアやヒントを得ることができた。どのような力を生徒に身につけさせたいかという明確な目標を持ち，授業に取り入れる活動の目的を生徒にはっきりと示すことで，自分の指導の方向性が明らかになり，自信がついたように思う。今後もよりよい授業を目指して自己研さんに努めていきたいと思う。最後に，このような機会を得られたこと，そしてご指導やご支援をいただいたアカデミアの先生方に心から感謝を申し上げたい。

能動的な読解を促すリーディング指導の工夫

科目名	コミュニケーション英語Ⅰ	学 年	1	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は１学年３クラス 119 名（男子 52 名，女子 67 名）の生徒である。中学校レベルの英語の基礎力が身についていない生徒が多い。明るいクラスもあれば，おとなしいクラスもある。各種上級学校（大学，短期大学，専門学校）への進学希望者が９割ほどいる。

解決すべき課題

解決すべき課題は 2 つあると考える。１つ目は，生徒に英語の基礎力を身につけさせることである。高等学校入学者選抜の学力検査の得点や記述内容および授業中の生徒とのやり取りから，英語の基礎力不足が大きな課題だと言える。２つ目は，主体的に英語学習に取り組む姿勢を涵養することである。学習態度は全体的に受け身で，積極的に発言したりする生徒はあまりいない。授業中，教師が板書した内容を丁寧にワークシートに書くことや基礎知識を問う質問に応じることができる生徒もいる。しかし，教師からの具体的な問いかけや丁寧な活動指示がない場合は，学習活動や思考が停止しているように見受けられる。受け身ではなく，生徒が能動的に英文を読もうとする態度を身につけながら，基礎力の充実も図れるようなリーディング指導の工夫が必要である。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第１回　英語学習に関するアンケート（７月実施：回答者数 111 人）

生徒のリーディングに対する自信,英語学習全般に関する意識を調査した(抜粋項目)。＊人数(%)

１．あなたは英語で読むことに自信がありますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
15 人（13.5%）	42 人（37.8%）	39 人（35.1%）	15 人（13.5%）

２．英語学習において，最も大切と感じているものは何ですか。

聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと
22 人（19.8%）	66 人（59.5%）	10 人（ 9.0%）	13 人（11.7%）

＜分析と考察＞

読むことに対する自信は予想以上に多くの生徒が持っていた（51.3%）。これは，教科書の英文読解では，事前に語彙の意味を確認するなど，多くの支援を前提としているため，「読めている」という実感があるためかもしれない。また，英語学習で大切なスキルとして 6 割近くの生徒が「話すこと」を挙げていた。「話すこと」については，「興味があることについて短い話をすることができる」という学年到達目標も設定しており，話す活動を読解活動に効果的に統合した指導計画を立てることで，課題である基礎力の充実と能動的に英文を読む態度の育成につなげられるのではないかと考えた。

・第 1 回リーディングテスト（7 月実施：受験者数 112 人）

英検 3 級の長文問題 2 題（要点と概要を問う問題，計 5 問×2 題）

受験者数	平均点	最高点	最低点	標準偏差	6 割以上正解者
112 人	4.7	10	0	2.29	41 人(36.6%)

＜分析と考察＞

10 点満点の平均点は 4.7 点で，合格ラインとされる 6 割以上正解できた生徒は，36.6%にとどまった。満点の生徒（2 名）がいる一方で，0 点の生徒（4 名）も見られた。ワークシートの支援に基づく教科書英文の読解にはある程度自信をもっているが，実際には，自分の力で英文を理解する力が全体的に身についていないということがあらためてわかった。生徒が自分の力で英文の概要・要点を的確に理解できるようにするための指導と自律的学習者を育てるための支援が必要であると考えた。

<u>リサーチ・クエスチョン</u>

生徒が能動的に英文を読み，概要・要点を理解することができる能力を育成するためにはどのようなリーディング指導をすればよいか。

改善の目安：英検 3 級の概要・要点を把握する英文読解問題を 60%以上正解する生徒の割合が 8 割を超える。

<u>改善のための手だて</u>

○ プレリーディング活動を充実させれば，自分の力で英文読解に取り組むことができるようになるだろう。

・クイズ形式でのやり取りやリスニング活動を行い，教科書の内容に関する背景知識を深める。

・生徒の興味関心が高まるよう，教科書の題材と生徒との関わりを考える機会を与える。

○ 読解ストラテジーを指導し，練習させれば，より的確に英文の概要と要点を把握できるようになるだろう。

・生徒が能動的に見通しを立てて英文を読むことができるよう，パラグラフの最初の 1 文を読み終えたあと，そのパラグラフの内容を予測する活動を行う。

・内容予測活動の後，本文を読み，①予想との相違点の確認，②内容に関する Q&A，③語彙の確認，④理解した内容の箇条書き，を行う。

○ ポストリーディング活動を工夫すれば，読む目的を意識することで，能動的な読解ができるようになるだろう。

・読解を通して学んだ背景知識を活用させるための，スピーキングのパフォーマンステスト（及びその準備段階としてのライティング活動）を行う。

・読解を通して学んだ表現を活用させるための，スピーキングのパフォーマンステスト（及びその準備段階としてのライティング活動）を行う。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回　英語学習に関するアンケート（１２月実施：回答者数 115）

生徒のリーディングに対する達成度や意識を調査した（抜粋項目）。 ＊人数（%）

１．初見で読む英文の内容について，予測したり，見通しを立てたりして読むことができる。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
14 人（12.2%）	52 人（45.2%）	42 人（36.5%）	7 人（ 6.1%）

２．初見で読む英文の単語の意味を予測したりできるようになった。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
25 人（21.7%）	60 人（52.2%）	26 人（22.6%）	4 人（ 3.5%）

３．以前より積極的に英文読解に取り組んでいる。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
12 人（10.4%）	49 人（42.6%）	48 人（41.7%）	6 人（ 5.2%）

＜分析と考察＞

初見英文の内容予測・読解の見通しについては，57.4%の生徒が（どちらかといえば）できると感じており，語彙の予測については，73.9%が（どちらかといえば）できるようになったと自己評価している。このことから予測読みのストラテジー指導に一定の効果があったと思われる。また，半数以上の生徒が（どちらかといえば）積極的に英文読解に取り組んでいると回答していることから，プレ・ポストのリーディング活動がある程度功を奏したと考えられる。受け身の学習態度について，改善の兆しが見えてきたように思う。これにより，生徒は能動的な読みを促され，英文の概要・要点を把握する姿勢につなげることができた。

・第２回リーディングテスト（12 月実施：受験者数 109 人）

英検３級の長文問題２題（要点と概要を問う問題，計５問×２題）

受験者数	平均点	最高点	最低点	標準偏差	６割以上正解者
109 人	6.2	10	1	2.28	59 人(54.1%)

＜分析と考察＞

・改善の目安には届かなかったが，6 割以上の正解者は 36.6%から 54.1%まで増えた。0 点の生徒はいなくなり，満点の生徒は 2 名から 7 名になった。平均点も 4.6 点から 6.3 点に上がり，統計学的な有意差も認められた（t 検定：$p = 0.00 < 0.05$）。一連の手だてにある程度の効果があったと思われるが，まだ半数近くの生徒が中学校卒業程度の読解力が身についていないと推察され，さらに工夫した指導の継続が必要であると考えた。

教師の変化

生徒が能動的に学習活動を行うためには，教師からの良質な問いかけが大切であることをあらためて実感し，生徒の理解力と既習事項をよく見極めたうえで，授業をデザインするようになった。生徒に「なぜだろう，知りたい」と思わせるような問いかけをプレリーディングで扱うことで，読む活動により前向きに，かつ能動的に取り組ませることができることもわかった。また，基礎・基本の定着のためには知識・技能のインプットも必要であるが，経験を通して学んだ知識は記憶に残りやすいと強く認識するようになった。語彙や文法といったボトムアップの学びだけでなく，生徒が教室での体験や，能動的な学びを通じて英語力を成長させられる方法を考えるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

能動的に読むための姿勢づくりを形にすることができた。同じ形式で行うことが，より生徒の自律的な読みへの姿勢につながる。しかし，読み物の内容や種類（物語，論説，新聞など）によっては，本リサーチで使用した「各パラグラフの最初の英文から内容を予測する方法」が有効とは限らない。そのため，能動的な読みにつながる他形式のワークシートも立案する必要がある。また，概要・要点理解の活動だけでなく，文レベルでの正確な理解を確認する活動も効果的に導入していきたい。

まとめ・感想

アクション・リサーチを行うことで生徒の成長を，感覚ではなくデータで知ることができる。それらのデータが有益なリサーチ・クエスチョンへとつながり，より確実な生徒の英語力の向上につながると感じた。単元の語彙レベルや扱う題材など，教材を生徒の実態や育成したい方向性に合わせて開発するとともに，生徒の学習活動をより実りあるものにするために，授業づくりに研さんを積んでいきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

田中博之(著者).(2016).『アクティブ・ラーニング実践の手引き』教育開発研究所

初見の英語長文を速く的確に読む力を伸ばす指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅰ	学 年	1	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象クラスは２クラス合計 79 名（男子 48 名，女子 31 名）の生徒である。どちらも素直で活発な生徒が多く，明るい雰囲気のクラスである。英語に苦手意識を持つ生徒もいるが，意欲的に英語学習に取り組む生徒が多い。ペアワークやグループワークでの音読やスピーキング活動では声をしっかり出して取り組む。部活や学校行事と学習の両立に悩みながら，卒業後はほぼ全員が国公立・私立大学へ進学することを希望している。

解決すべき課題

大学入試を目指し，模擬試験等における長文読解問題に取り組むなかで苦手意識を持つ生徒が多く，英文の各段落の機能を理解し，概要・要点をとらえる力が育っていない。志望している上級学校へ進学するためには，設問のある初見の英文を正確に読み解き解答することが求められるが，そのために必要な基礎的リーディングスキルが不足しているのが現状である。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第１回 授業アンケート（５月実施：回答者数 79）

１．この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか？2 つ選んでください。

英語を聞く力	英語を話す力	英語を読む力	英語を書く力	語彙の知識	文法知識
28 名(35%)	42 名(53%)	27 名(34%)	18 名(23%)	14 名(18%)	22 名(28%)

２．あなたは長めの英文を読解することが得意だと思いますか？

まあまあ得意だと思う	どちらかといえば得意だと思う	どちらかといえば不得意だと思う	不得意だと思う
6 名(8%)	18 名(23%)	32 名(41%)	23 名(29%)

３．あなたにとって英文読解の一番大きな課題は何ですか？

概要や要点をとらえることが難しい	読み進めるスピードが遅い	単語・イディオムの知識不足で読み進められない	構文の知識不足で文の意味が取れない
10 名(13%)	16 名(20%)	45 名(57%)	5 名(6%)

＜分析と考察＞

53%の生徒が英語を話せるようになりたいと答えていると同時に 34%の生徒が英語を読む力を伸ばしたいと答えている。口頭でのコミュニケーション能力習得への興味とともに，進学に向けて英文を読む力の必要性を感じているのではないかと考えられる。長文読解については 70%の生徒が苦手意識を持っており，その原因として単語やイディオムの知識不足を挙げている生徒が 57%いた。本校で

は１週間に３回英単語・熟語テストを実施しており２年終了までに指定の単語集を最後まで一通り学習する。その定着を図ろうとする過程で，まだ語彙に自信を持てていないことが原因だと考えられる。

・第１回 読解力テスト（５月実施：対象者 79 名）

過去の英語検定２級の長文読解問題（４－C）を使って生徒の読解力を調べた。(5 点満点)

平均値(正答率)	標準偏差	最大値	最小値	6 割(3 問)以上正答
2.3 (46%)	1.20	5	0	29 人 (37%)

＜分析と考察＞

全体の正答率が 46%にとどまり，4 名の生徒が 0 点，合格ラインとされる 6 割以上正答できた生徒は 37%であった。このことから，総じて初見の長文を読むために必要な基礎的なスキルが身についていないことが見受けられた。生徒の感想として，「時間が足りなかった」との回答が多かった。その要因としては語彙力や文法知識不足が英文理解を阻んでいることが予想されるが，同時にそれ以外の英文読解に必要なスキルについても認識が不足していることも考えられる。5 問中はじめの 4 問は各パラグラフに対応した要点問題であり，比較的解きやすいと考えられるが，正答率は決して高くなかった。パラグラフのトピックを理解するという基本的な読み方ができていない生徒が多いことがわかった。想像以上に平均値が低く，読解力の伸長が急務と考えられた。

リサーチ・クエスチョン

初見の長文を読み，概要・要点を理解する力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：英語検定２級レベルの長文読解問題（４－C）で 6 割以上正答する生徒が，全体の 70%以上になる。

改善のための手だて

○ 読解タスクを工夫して与えれば，英文をより速く，正確に読めるようになり，概要・要点把握を的確にできるようになるだろう。

・トピック，筆者の主張，主張の支持文を読み取り，ペアで自分の理解を確認する活動を通じて概要を把握できるよう指導する。

・英文とその内容を瞬時に頭のなかで結びつける練習として，まず文法や文構造を解説し英文全体の意味を理解させたうえで，ペアでチャンクごとに日本語から英語へ変換する活動をさせる。

○ 英文の論理構造や読解のストラテジーを明示的に指導すれば，自分の力で英文を読み進めることができるようになるだろう。

・ディスコースマーカーによる各パラグラフの関連性理解などの読解ストラテジー指導を行う。

・初見の英語長文問題を与え，くり返し読解演習を行い，誤解や誤答の原因を考えさせる。

・英文の内容に関連したディスカッションクエスチョンを与え，内容スキーマの深化を促す。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・長文読解タスクの取組状況

“Get the Big Picture”という活動のなかで，トピック，筆者の主張，主張の支持文を整理する一連の演習を取り入れたところ，意欲的に読解に向き合う姿勢が見られるようになった。以前よりも目的意識を持って積極的に活動に取り組むようになったと感じられた。

・読解のストラテジー指導への反応

生徒が自力で読み進められるよう，ディスコースマーカーに特化して解説をする時間を設けた。その後，長文読解演習を重ねていくにつれ，メモや下線を書き込むなど文章全体の流れを意識しながら読む姿が多く見られるようになった。

・第２回 授業アンケート（１２月実施：回答者数 77）

１．これまでの授業を通して，あなたの英語を読む力は伸びたと思いますか？

伸びたと思う	どちらかといえば 伸びたと思う	どちらかといえば 伸びなかったと思う	伸びなかったと思う
10 名(13%)	64 名(83%)	2 名(3%)	1 名(1%)

２．授業で扱ったさまざまな活動・教材は，あなたの英語を読む力を伸ばすのに役立ちましたか？

役立ったと思う	どちらかといえば 役立ったと思う	どちらかといえば 役立たなかったと思う	役立たなかったと思う
13 名(17%)	59 名(77%)	5 名(6%)	0 名(0%)

３．あなたにとって英文読解の一番大きな課題は何ですか？

概要や要点を とらえることが難しい	読み進める スピードが遅い	単語・イディオムの知識 不足で読み進められない	構文の知識不足で 文の意味が取れない
5 名(6%)	12 名(15%)	51 名(65%)	8 名(10%)

＜分析と考察＞

英語を読む力について「(どちらかといえば) 伸びたと思う」と答えた生徒が 96%いたことから，全体的に長文読解に自信がついたのではないかと考えられる。また，授業での活動・教材について「(どちらかといえば) 役に立った」と感じている生徒の割合が 94%だった点から，手だての効果がある程度は表れたと考えられる。概要・要点把握や読む速度を英文読解の課題として挙げた生徒の数は減少したが，語彙不足を課題とする生徒は 8%増加した。このことから，未知語の推測等のストラテジーが使えていないことが考えられる。

・第２回 読解力テスト（１２月実施：対象者 77 名）

再度，過去の英語検定２級の長文読解問題（４－C）を使って生徒の読解力を調べた。(5 点満点)

平均値(正答率)	標準偏差	最大値	最小値	6 割(3 問)以上正答
2.9 (58%)	1.23	5	0	51 人 (66%)

＜分析と考察＞

6 割（3 問）以上正答した生徒は 66%になり，第１回の 37%からかなり増えているが，改善の目安にはわずかに届かなかった。全体の正答率は 58%で，まだ満足のいく結果とは言えないが，2 回分がそろっている 77 人のデータについては統計的に有意な向上が見られ（t 検定：$p = 0.00 < 0.05$），今

回の取組に一定の成果があったのではないかと考えられる。生徒たちはこのテストで初見の英文読解に取り組んだが，授業のなかで教科書英文以外のものを読む機会を十分に与えてこなかったことが反省点として残る。「本文を読解するだけでは面白くない」という生徒の声もあり，教科書英文のトピックに関連した別の英文の読解やリスニング活動などを単元のなかに組み込んで，生徒が楽しんで，スキルを向上させられるような指導計画の工夫が必要であると感じた。

教師の変化

・リーディングストラテジーの指導を通して，教師自身が本文を深く理解しながら教材研究を行うようになり，英文のトピックセンテンスを中心としたアウトラインをうまく解説できるようになった。
・以前は生徒のレベルを今回のような形で把握せず，主観的な推測に基づいて教材を作成していたが，アンケートの内容を参考にしながら，生徒のニーズに合わせた教材を作成できるようになった。
・“Get the Big Picture”の活動やペアワーク，リテリング活動のような工夫を加えることによって授業進行にメリハリがつき，リズムよく授業を展開できるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

・読解指導について，生徒にとってより実用的で興味深い学習になるよう，文章スタイルやトピックの精選をしたうえで，教科書以外の英文にも取り組ませる工夫をしなくてはならない。
・ペアワークやグループワークについて，グループの各生徒に番号を与え，教師の発問に対し指定された番号の生徒だけが答えられるといった手法などを取り入れる工夫が必要である。
・今回テーマとして重視したこともあり，授業時間の多くは読解に割かれていた。今後はリスニング，スピーキング，ライティングを含めた統合的言語活動を授業に導入する必要がある。
・今後は毎時間で行うタスクについて変化を加え，生徒にとって飽きのこない手だてを取り入れていく必要がある。

まとめ・感想

英語教師としてまだ経験が少ないなかで，どのように授業を行えばよいか試行錯誤をくり返していたときに今回の研修を受けたことは大きな支えになった。多くの先生方との話し合いを通じ，毎回さまざまな発見があった。それらを余すところなく授業に導入し改善を図ることができた。はじめは生徒の集中が続かないことがあった長文読解指導も，研修で学んだ学習活動を授業に取り入れることで生徒の授業に臨む姿勢が徐々に積極的になっていった。また，より計画的に，明確な目標を持って指導を行うことが結果や数字に表れるということを，研究活動を通じて実感できた。今後も生徒に必要な指導を的確に見極め，彼らの意見も積極的に取り入れながら研さんに努めたい。そして，より質の高い指導ができるよう成長していきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

卯城祐司. (2009).『英語リーディングの科学』研究社
鈴木寿一・門田修平. (2014).『英語音読指導バンドブック』大修館書店

自力での英文読解を促す指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学 年	3	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は２クラス 70 名（男子 30 名，女子 40 名）の生徒である。英語に対する苦手意識が強く，自信のなさから自発的な発言はあまり見られない。自分の力で英文を読み解くことをあきらめがちで，理解している実感が湧きにくいようである。ほとんどの生徒が進学（専門・短大・四大）を希望している。

解決すべき課題

自分の力でまとまった英文を読み，概要・要点を的確につかむ力を身につけさせたいのだが，どのように読んで内容をつかむかという読解ストラテジーの指導が不十分である。逐語訳によって理解しようとするが，その日本語訳自体を十分に理解していないように見える。文法知識や語彙力が不足しており，教科書以外のさまざまな英文を読む機会もあまりない。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・英文読解プレテスト（７月実施：受験者 69）

英検準２級（４Ｂ）の読解問題を用いて生徒の読解力を測定した。

＊5 点満点（問１～問４は要点問題，問５は自作の概要問題）

	0 点	1 点	2 点	3～5 点	平均点
プレテスト	7 人（10.3%）	18 人（26.5%）	27 人（39.7%）	17 人（24.6%）	1.9

問題タイプ別の結果分析：要点問題（問１～４，0～4 点），概要問題（問５，１点）

要点問題の平均点と正答率
1.6（40.0%）

概要問題	不正解	正解
得点人数（割合）	48 人（69.7%）	21 人（30.4%）

＜分析と考察＞

準２級の合格ラインの目安とされる正答率 6 割以上（3～5 点）の生徒の割合は 3 割に満たず，0 点や１点の生徒も多く見られた。要点を問う問題では，平均が 4 点中 1.6 点であった。また，概要を問う問題では 69 人中 48 人が不正解であった。

高校中級レベルの英文を自分の力で読んで理解するという読解力が，全体的に身についていないということがあらためてわかった。要点をつかむことができないので，概要をとらえる問題は一層困難になってくるようである。

・英文読解プレテストの振り返りと読解練習の感想（７月実施：回答者 68）

１．読解問題を解いてみてどうでしたか。

難しかった	どちらかといえば難しかった	どちらかといえば簡単だった	簡単だった
43 人（63.2%）	20 人（29.4%）	4 人（5.9%）	1 人（1.5%）

２．授業の冒頭に行っている 5-minute Training（英文読解練習）は役に立っていると思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
20 人（29.4%）	40 人（58.8%）	8 人（11.8%）	0 人（0.0%）

＜分析と考察＞

読解問題について，92.6%の生徒が「難しかった」または「どちらかといえば難しかった」と答えた。難しさを感じた理由（自由記述による回答）としては，「単語がわからないから」という内容がほとんどであった。英文の意味を日本語に置き換えて理解することに慣れてしまっているため，概要・要点をすばやくとらえることが難しく感じたのだろうと思われる。一方で，しっかり精読をしないと生徒の不安感が残るため，両方のアプローチを組み合わせた指導が必要であると感じた。英文読解トレーニングとして開始した 5-minute Training については，合わせて 88.2%の生徒が「役立っている」と答えていることから，継続実施できるだろうと考えた。

リサーチ・クエスチョン

自分の力でまとまった英文を読み，概要・要点を的確につかむ力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検準２級の読解問題を読み，正答率が 6 割以上になる生徒が全体の 7 割を超える。
自分の力で英文が読めるようになったと実感する生徒が全体の 7 割を超える。

改善のための手だて

○ 概要・要点を読み取るタスクを与えれば，自分の力で内容を理解できるということを実感できるようになるだろう。
・精読の前に，パートごとに概要と要点を問うタスクに取り組ませる。

○ リーディングストラテジーを明示的に指導すれば，自分の力でまとまった英文を読み進めることに役立つだろう。
・英文のパラグラフ構造を指導し，トピックセンテンスを特定する練習をさせる。
・キーワードをとらえ，代名詞が示す内容を確認しながら読む等の方略を指導し，練習させる。

○ 教科書以外の英文で継続的に読解練習を行えば，自分の力で英文を読むことに慣れ，自信も高まるだろう。
・授業の冒頭に 100-150 語程度の英文を使って，5 分間読解トレーニングを行う。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・概要・要点を読み取るタスクについて

精読前に自力で TF 問題を解くことでパート全体の内容に触れ，概要を把握する活動を行った。限られた時間内にパートの英文全体をすばやく読む作業を繰り返すことで，まとまった英文を独りで読む集中力が身についたように思われる。要点を読み取るタスクでは，キーワードやキーセンテンスについて，日本語を補助的に使いながら正確に説明する活動を行った。相手に要点を正確に説明するペアワークを継続的に行ったところ，あきらめずに英文を読む姿勢を見せる生徒が増えた。

・リーディングストラテジーについて

タスクや精読に取り組みながら，ディスコ―スマーカーや指示語の内容など，英文読解のカギとなるような部分に印をつけるという作業が自主的にできるようになってきた。

・５分間読解トレーニングについて

当初は教科書以外の英文を初見で読むことが困難だと感じているようであったが，回を重ねるごとに，正答できなくても何とか読んでみようという意欲が見られるようになった。

・英文読解ポストテスト（１２月実施：受験者 70）

英検準２級（４Ｂ）の読解問題を用いて，再度生徒の読解力を測定した。

	0 点	1 点	2 点	3～5 点	平均点
プレテスト	7 人（10.3%）	18 人（26.5%）	27 人（39.7%）	17 人（24.6%）	1.9
ポストテスト	3 人（4.3%）	9 人（12.9%）	18 人（25.7%）	40 人（57.1%）	2.4

問題タイプ別の結果分析：要点問題（問１～４，0～4 点），概要問題（問５，１点）

要点問題の平均点と正答率
2.4 (60.0%)

概要問題	不正解	正解
得点人数（割合）	50 人（71.4%）	20 人（28.6%）

＜分析と考察＞

１回目と比べ，6 割以上正答できた生徒が 32.5%増え，0 点や 1 点の結果であった生徒の割合は減った。しかし，要点問題の正答率は 20%の伸びがあった一方で，問５の概要問題の得点者数は１人減った。概要把握や要点整理をするタスクに取り組む活動を継続してきたことで，正確に英文を理解できるようになった生徒が増えたと思われる。改善の目安には至らなかったが，全体の正答率が上がったことは大変喜ばしい。ただし，概要把握の力を伸ばすためには今後タスク等の改善をしていく必要がある。

・英文読解ポストテストの振り返りと読解力の自己評価（１２月実施：回答者 67）

１．読解問題を解いてみてどうでしたか。

難しかった	どちらかといえば難しかった	どちらかといえば簡単だった	簡単だった
17 人（25.4%）	31 人（46.3%）	19 人（28.4%）	0 人（0.0%）

２．以前よりも，「英文を読む力」が身についたと思いますか。※無回答１人

思う	どちらかといえば思う	どちらかといえば思わない	思わない
18 人（26.9%）	42 人（62.7%）	5 人（ 7.5%）	1 人（ 1.5%）

＜分析と考察＞

読解問題について，１回目よりも「難しかった」と答えた生徒が 37.8%減った。以前よりも英文を理解できるようになったという実感の表れであると思われる。上記データには示していないが，TF タスクについては，ほとんどの生徒（67 人中 65 人）が有効な手だてだと感じていた。合わせて 60 人(89.6%)の生徒が英文を読む力の向上を実感しており，この点においては改善の目安を達成した。

教師の変化

・教材研究をさまざまな観点から行い，活動やタスクに明確な目的を持たせるようになった。
・自分自身だけでなく，生徒にも活動の目的や目標をつねに意識させるようになった。
・生徒が達成感や自信を持てるように，小さなステップで進む活動計画を立てるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

・継続的に読解トレーニングを行ったものの，生徒の語彙力や文法理解が不足している状態では，十分な効果を得ることができなかった。読むための基礎的な語彙・文法の指導を工夫する必要がある。
・生徒にリーディングストラテジーを理解させるために，語彙や文構造に対する生徒の理解度を考慮したうえで適切なレベルの英文を用い，効果的な実践練習を行っていくなどの改善をしていきたい。

まとめ・感想

今回のアクション・リサーチは，自分自身の授業を一から見直す機会になったと思う。授業における課題を，いかにして解決に向けるかについて考え続けることは，苦労の連続であったが，生徒が成果を出した時には喜びと手ごたえを感じた。当初は「単語がわからない」という消極的なコメントの多かった生徒たちが，最後には「代名詞に気をつけるようになった」,「あきらめずに読むようになった」など，できるようになったことを自覚し，明確に言及できるようになったことは大きな進歩であり，教師が生徒の力を信じて改善の努力を続ける大切さを実感した。最後までよく頑張って取り組んでくれた生徒たちに感謝している。今後も課題の発見と改善を意識して授業づくりをしていこうと思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

Richards, J.C. and Eckstut-Didier, S. (2012). *Strategic Reading, Level 1. Student's Book.* Cambridge: Cambridge University Press.

Scholastic Inc. (2002). *Scholastic Success With Reading Tests, Grade 3.* New York: Scholatic Teaching Resources.

読解タスクを工夫したリーディング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学 年	2	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は 2 クラス，合計 80 名（男子 41 名，女子 39 名）の生徒である。全体として，クラスの雰囲気は明るく落ち着いており，真面目に授業に取り組んでいるが，積極的な発言や質問は少なく，受け身な態度の生徒が多い。ほぼ全員が大学や専門学校への進学を希望しているが，その多くが推薦入試での進学を考えている。

解決すべき課題

初見の英文を読む際に日本語訳に頼ってしまい，日本語訳を読むことで理解したつもりになってしまっている生徒が多い。授業時には，自分の力で英文を読み解いて理解する楽しみを味わってもらいたいと考え，なるべく日本語訳に頼らないように，授業の最後に日本語訳を配るなどしているが，英文を読む時に日本語訳がないと不安を感じるようである。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第１回　英語学習に関するアンケート調査（７月実施：回答者数 78）

１．英文を読むこと（長文読解）が好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
8 人（10.3%）	10 人（12.8%）	39 人（50.0%）	21 人（26.9%）

２．英文を読んで内容を理解することが得意ですか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
6 人（ 7.7%）	20 人（25.6%）	34 人（43.6%）	18 人（23.1%）

３．英文を読んで内容理解の問題を解くことが得意ですか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
5 人（ 6.4%）	13 人（16.7%）	41 人（52.6%）	19 人（24.4%）

４．英文を読んで読みにくいと感じる場合，その原因は何だと思いますか。（複数回答可）

① 知らない単語や表現がある	69 人（88.5%）	⑤ 英文全体の大意をとらえるのが苦手	24 人（30.8%）
② 文の切れ目や構文がとらえられない	15 人（19.2%）	⑥ 論理の流れをとらえるのが苦手	20 人（25.6%）
③ 読むスピードが遅い	38 人（48.7%）	⑦ 内容に関する背景知識が不足している	16 人（20.5%）
④ 段落ごとの要点を把握するのが苦手	21 人（26.9%）	⑧ その他（集中力が続かない，など）	34 人（43.6%）

・第１回　読解力テストー英検２級（７月実施：受験者数 78）＊1 点×5 問

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5
正答人数（人）	55	30	58	15	14
正答率（%）	70.5	38.5	74.4	19.2	17.9

6 割（3 問）以上正答した生徒：22 人（28.2%）

＜分析と考察＞

長文読解が好きな生徒は全体の 23.1%しかいないが，内容を理解するのが得意だと感じている生徒は 33.3%に増える。しかし，読解問題を解くのが得意な生徒は 23.1%にとどまる。これは日本語訳を読んでなんとなく理解できているつもりだが，問題を解くと間違っている，ということが多いためだと考えられる。また，内容理解を妨げる要因として，未知の単語の存在を挙げる生徒が 88.5%にのぼり，未知語の意味や話の流れを推測しながら読むことを苦手としていることがはっきりとわかった。英検２級の問題を使った読解力テストでは，合格ラインとされる 6 割以上正答できた生徒はわずか 28.2%であった。設問別の正答率を見ると，Q5（概要理解問題）が最も低く（17.9%），文章の大意を把握することを苦手とする生徒が多いことがわかった。

<u>リサーチ・クエスチョン</u>

日本語に頼らずに，英文の概要・要点を読み取る力を身につけさせるには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・英検２級レベルの長文問題に 6 割以上正答する生徒が全体の 70%以上になる。
・英文の内容理解や問題を解くことが得意であると思う生徒が全体の 70%以上になる。

<u>改善のための手だて</u>

○ 読解タスクを工夫すれば，より的確に英文の概要・要点を理解できるようになるだろう。
・パートごとのサマリーや要点を問う問題に取り組ませる。
・パラグラフごとの大意をつかんで，そのタイトルを短いフレーズで考えさせる。
・パラグラフのタイトルフレーズを活用して，パラグラフごとのサマリーを 1～2 文で考えさせる。
・各パラグラフのサマリーをつなげて文章全体のサマリーを英文で書く活動を取り入れる。

○ 読解ストラテジーを指導すれば，トピックセンテンスや未知語が推測できるようになり，自分の力で英文を読み進めることができるようになるだろう。

・ディスコースマーカーに注目して文の流れを意識させる。
・スラッシュリーディングを行いながら，主語と動詞を意識させる。
・トピックセンテンスの位置に注目しながら読むよう意識させる。
・グラフィックオーガナイザーを用いて，英文の構造を考え，話の流れを把握させる。
・新出単語の提示の際に英文で定義を与えて意味を考えさせる。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回　英語学習に関するアンケート調査（１２月実施：回答者数 78）

１．英文を読むこと（長文読解）が好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
9 人（11.5%）	15 人（19.2%）	44 人（56.4%）	10 人（12.8%）

２．英文を読んで内容を理解することが得意ですか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
10 人（12.8%）	25 人（32.1%）	34 人（43.6%）	9 人（11.5%）

３．英文を読んで内容理解の問題を解くことが得意ですか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
12 人（15.4%）	22 人（28.2%）	36 人（46.2%）	8 人（10.3%）

４．英文を読んで読みにくいと感じる場合，その原因は何だと思いますか。（複数回答可）

① 知らない単語や表現がある	59 人（75.6%）	⑤ 英文全体の大意をとらえるのが苦手	18 人（23.1%）
② 文の切れ目や構文がとらえられない	13 人（16.7%）	⑥ 論理の流れをとらえるのが苦手	15 人（19.2%）
③ 読むスピードが遅い	30 人（38.5%）	⑦ 内容に関する背景知識が不足している	10 人（12.8%）
④ 段落ごとの要点を把握するのが苦手	13 人（16.7%）	⑧ その他（集中力が続かない，など）	25 人（32.1%）

・第２回　読解力テストー英検２級（１２月実施：受験者数 78）＊1 点×5 問

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5
正答人数（人）	62	56	51	19	28
正答率（%）	79.5	71.8	65.4	24.4	35.9

6 割（3 問）以上正答した生徒：42 人（53.8%）

＊第１回，第２回の結果比較

	人数	平均点	標準偏差	最大値	最小値
７月	78	2.2	0.92	5	1
１２月	78	2.8	0.99	5	1

＜分析と考察＞

第２回のアンケートでは，英文の内容を理解することや問題を解くことが「(どちらかといえば）得意」と感じる生徒の割合はそれぞれ 44.9%，43.6%になり，目標の 70%には届かなかった。しかし 2 回のアンケート結果を比較すると，いずれも上昇傾向にあり，「苦手」という生徒が半減していることから，英文読解に慣れて少しずつ苦手意識を克服してきていることがうかがえる。依然として 7 割の生徒が，長文読解が好きではないとしており，主体的に読解に取り組ませる工夫が必要であると感じた。内容理解の障害として未知語の存在を挙げる生徒はまだ多いものの，減少がみられ，未知語にとらわれずに読み進められる生徒が増えつつあると考えられる。英検２級の問題を使った読解力テストについては，平均点の上昇がみられ，t 検定でも有意差が認められた（$p = 0.00 < 0.05$）。こちらも目標の 70%には届かなかったが，各設問の正答率も上昇し，6 割以上正答した生徒の割合は 28.2%から 53.8%まで増加した。生徒の読解力が上昇傾向にあることは確かなので，今後も継続して取り組むことにより，さらなる改善が見込まれる。

教師の変化

・生徒が苦手とすることを把握するよう努め，それに対してどのような工夫をすればよいか，より深く考えて指導計画を立てるようになった。
・読解力育成のための効果的な指導法や活動について考えるようになり，教材の深い読みこみに基づいた読解タスクの工夫や読解ストラテジーの明示的な指導ができるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

今回，生徒の取組やテスト結果においては一定の改善がみられたが，目標達成までにはまだ隔たりがある。長文を読んで設問に答えることを作業としてこなすのではなく，英文を読んで理解できる楽しさを味わえるようになれば，さらに生徒の意欲も高まるだろう。リーディングスキルの上達だけでなく，英文を読む楽しさや，英語を使ってコミュニケーションを図る楽しさを実感できるような授業作りを，さらに進めていく必要がある。

まとめ・感想

この研修を通じてさまざまな指導技術や授業改善の知識を得ることができ，自分のふだんの授業を振り返り，見直すことができた。今まで以上に，何のためにこの活動を行っているのか，という点を意識しながら授業を組み立て，設問を考え，ワークシートに工夫を凝らすようになった。また，生徒の能力やニーズを把握し，さまざまな活動を授業に取り入れ，反応を見ながら，さらに改善を図ろうという意識がつねに働くようになった。今後も授業改善を重ね，生徒が主体的に取り組み，学ぶ楽しさを感じながら学習できるような授業づくりを継続していきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

佐野正之(編著). (2000).『アクション・リサーチのすすめ』大修館書店

自分の力で読解する力を育てるリーディング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅰ	学 年	1	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は２クラス 62 名（男子 29 人，女子 43 人）の生徒である。全体的に学習に前向きに取り組む姿勢が見られ，授業中の発言も多い。一方で中学校のころから基礎が身についておらず，英語学習に対する自信を失っている生徒も多い。進路状況は前年度入学の生徒までは専門学校への進学を希望する生徒が大半だったが，今年度入学生である対象生徒たちの現時点での希望は４年制大学の割合が大きく増えている。

解決すべき課題

英文を読むときに日本語に訳せないと読むことを諦めてしまう生徒が多い。単語一つひとつを辞書で調べて訳さないと読解ができず，時間がかかってしまい諦めてしまう生徒や，単語の意味を調べられても文全体が何を言っているのかが理解できない生徒が多い。よって自分の力で概要や要点を読解する力が全体的に身についていないといえる。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第１回 読解テスト（英検３級レベルの長文問題）

6 割以上正解している生徒の割合

受験者数	6 割以上正解	6 割未到達
62 人	43 人(69.4%)	19 人(30.6%)

概要把握問題

受験者数	正解	不正解
62 人	24 人(38.7%)	38 人(61.1%)

＜分析と考察＞

ほぼ 7 割の生徒が合格ラインとされる 6 割以上の正答率を超えていることがわかった。しかし英文全体の概要を理解している生徒は 4 割に満たない。このことから，生徒たちの課題は文の概要の読み取りであると考えた。

・第１回 アンケート：英語に関する意識調査（６月実施：回答者数 62 人）

Q3 初めて読む英文の一番大事なポイントを理解できますか。

できると思う	どちらかといえば できると思う	どちらかといえば できないと思う	できないと思う
3 人(4.8%)	26 人(41.9%)	26 人(41.9%)	7 人(11.3%)

Q7 あなたが英語の文を読むときに最も難しいと感じること，困ることは何ですか。

単語に関すること	文法に関すること	発音に関すること	その他
35 人(56.5%)	16 人(25.8%)	8 人(12.9%)	3 人(4.8%)

＜分析と考察＞

特に概要把握についての正答率が低いことから，概要に対する意識を調査したところ，概要把握について自信のある生徒は 50%未満に留まった。また，英語を読むときに半数以上の生徒が単語について課題を感じていることもわかった。未習語や，既習であるが習得できていない語の意味を推測しながら読みすすめていくストラテジーを身につけさせる必要があると考えた。

リサーチ・クエスチョン

自分の力で英文を読んで，その概要や要点を的確に読み取る力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・英検３級の読解問題で 6 割以上正解する生徒が全体の 8 割を超える。
・特に概要把握問題に正答できる生徒が全体の 6 割を超える。

改善のための手だて

○ プレリーディング活動を充実させれば，より主体的に読解に取り組むようになるだろう。
・画像などを活用したオーラルイントロダクションを行う。
・本文の主題に沿ったクイズや日本語で意見交換するアクティビティをする。
・本文の主題を生徒自身に予測させる。

○ 英文の概要・要点を読み取るタスクを設定すれば，より的確な内容理解ができるようになるだろう。
・各パラグラフの要点を問うタスクを設定する。
・各パートやパラグラフ単位でのタイトル付けのタスクを設定する。
・パートの内容を日本語１文でまとめさせる。

○ 未知語の意味を推測するストラテジーを身につければ，自分の力で英文を読み進めることができるようになるだろう。
・本文を読むためのキーワードとして焦点を当てる語を限定する。
＊受容語彙と発表語彙と既習語に分け，各パートの推測用ワードリストを作る。
＊受容語彙は意味を与え，発表語彙のうち推測が難しい単語は 2 択で意味を選ばせる。
＊既習語と発表語彙のなかでも推測が可能なものは意味を与えない。
＊ワードリストの正解確認は読解後に行う。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回 読解テスト（英検３級レベルの長文問題）

6 割以上正解している生徒の割合

受験者数	6 割以上正解	6 割未到達
62 人	29 人(46.8%)	33 人(53.2%)

概要把握問題

受験者数	正解	不正解
62 人	29 人(46.8%)	33 人(53.2%)

＜分析と考察＞

基準とした 6 割以上正解している生徒の割合は，第１回（69.4%）から第２回（46.8%）で大きく下がってしまった。概要把握問題の正答率は上昇しているが，改善の目安には届かず統計学的な有意差もなかった(McNemer 検定：$p = 0.44 > 0.05$)。読解テキストの難易度は 2 回とも英検３級なので同等であるはずである。また 1 文に対する平均語数は第２回の方がわずかに多いが，語彙レベルは同等であることを英文語彙難易度解析プログラム(染谷, 2006)で確認している。

生徒の取組状況を比較してみると明らかに第２回の方が悪く，白紙解答もいくつか見られた。この差が結果に結びついていると推察される。全体的に，外部試験も含め，成績に関わらないものについては前向きに取り組まない傾向になってきている。学習動機の喚起に課題があると再認識した。

・第２回 アンケート：英語に関する意識調査（１２月実施：回答者数 62 人）

Q3 初めて読む英文の一番大事なポイントを理解できますか。 ＊下段は第１回のデータ

できると思う	どちらかといえば できると思う	どちらかといえば できないと思う	できないと思う
7 人(11.3%) *3 人(4.8%)*	18 人(29.0%) *26 人(41.9%)*	28 人(45.2%) *26 人(41.9%)*	9 人(14.5%) *7 人(11.9%)*

Q4 英文を読んでいる最中に知らない単語に出会ったとき，どうしますか。

意味を推測して 読み進める	意味を調べて 読み進める	無視して 読み進める	読むことを やめてしまう
25 人(40.3%)	16 人(25.8%)	17 人(27.4%)	4 人(6.5%)

＜分析と考察＞

概要理解についての生徒の自己評価の変化を見ると，「理解できると思う」と回答した生徒は前回に比べると増えているが，「(どちらかといえば）できないと思う」と回答している生徒の割合が増えてしまった。教科書の英文の難易度が上がってきているのに対し，生徒の学習動機を高めることができなかったことに問題があると考えられる。未知語を推測するストラテジーの意識づけができたといえる生徒は 4 割にとどまった。話の本筋を見失うことなく，自分の力で最後まで読み切ることができる指導・練習が不十分だったと言わざるを得ない。

教師の変化

生徒の活動一つひとつについて，目的を考えながら作ることができるようになった。ただ慣例的に定番の活動を並べるのではなく，どのような目的でアクティビティをするのか，生徒に説明したうえで実施することを心掛けるようになった。また 3 年間を通して生徒をどのように指導していくか，どのように成長させたいかを考えて年間の計画を立てるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

生徒の学習動機を喚起し，意欲を保っていく工夫をすることが必要である。英語学習の理由，一つひとつの言語活動についての目標・目的・課題などについて，自分がわかっているだけでなく，生徒に十分に説明し，つねに理解したうえで学習に取り組ませる必要がある。そのうえで生徒が少しずつ成功体験を積み重ねながら英語学習に対し達成感を得られるように，細かな確認テストや活動を計画的，段階的に行っていきたい。

まとめ・感想

初めてのアクション・リサーチを通じて，生徒の能力を伸ばすための授業改善には生徒の声にしっかり耳を傾けることが必要だと感じた。漠然とした手ごたえだけでなく，生徒が本当に活動を通じて伸びを感じているのかどうかをアンケートやテストによって調査することで，ただ楽しいだけの活動ではなく，生徒の身になる活動や授業を作れるということを実感できた。今回は残念ながら生徒の伸びが見られなかったが，これを反省材料として，生徒の学習意欲を高め，ニーズを分析し，必要な活動や課題を取り入れながら，次年度以降にも継続して課題に取り組み続けたい。一緒に研修を受けた先生方に授業についてさまざまなことを相談しながら，大きな刺激を受けることができた。そしてまだまだ英語教師として努力が必要であるということをあらためて思い知ることができた。今後もプロとして自己研さんを続けていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

染谷泰正. (2006). Word Level Checker（英文語彙難易度解析プログラム） [Web application]
http://someya-net.com/wlc/index_J.html

一貫性のある意見文を書く力を育てる指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅰ	学 年	1	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は２クラス 71 名（男子 35 名，女子 36 名）の生徒である。ペアワーク等の活動に意欲的に取り組み，「英語が話せるようになりたい」「留学したい」という生徒もいる。全体的に英語学習に対する意欲は高いものの，中学校既習事項の習得が十分でない生徒が多い。

解決すべき課題

１学期の授業では，初期指導の重要性を考慮し，授業に対する姿勢や約束事について徹底的に指導した。そのためか，ペアワーク等の活動には積極的に取り組めている。しかし，英文を書かせてみると，箇条書きのようでまとまりがなく，語彙や文法のエラーも多い。当該生徒たちは大学入試で４技能試験を経験することになる生徒であり，学校の取組として１月に全員に GTEC Basic レベルを受験させ，希望者向けに実用英語技能検定（英検）を受検する機会を設けているが，日常的にライティング指導を効果的に行うことが急務である。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・CEFR-J 準拠の自己評価「書くこと」（６月中旬実施：回答者数 71）

CEFR-Jにおける段階のうち中学校～高等学校中級レベルに相当する A1.1～B1.2 の7段階の能力記述文を見て，自分に当てはまるレベルを答えさせたところ，人数分布は以下の通りであった。

A1.1	A1.2	A1.3	A2.1	A2.2	B1.1	B1.2
7 人 (9.9%)	7 人 (9.9%)	24 人 (33.8%)	21 人 (29.6%)	10 人 (14.1%)	2 人 (2.8%)	0 人 (0.0%)

・第１回　アンケート調査（７月中旬実施：回答者数 70）

生徒のニーズや実態を把握するためにアンケートを実施した。その結果，全体の 88.6%の生徒が英語力の向上が「必要である」と回答した。自分が得意だと思う技能（複数回答可）については，リスニング，リーディングと回答した生徒がそれぞれ 29.2%，40.3%であったのに対し，スピーキング，ライティングと回答した生徒はそれぞれ 13.9%，25.0% であった。

・第１回　ライティングテスト（７月中旬実施：受験者数 70）

トピック：あなたが今，「やってみたいこと」や「やっておくべきと思うこと」について，自分の考えを書きなさい」（20 分）＊GTEC Basic のライティングサンプル問題

評価方法：自作ルーブリックによる分析的評価

	内容	構成	正確さ
A （5 点）	内容に一貫性があり，自分の意見とその意見をサポートする理由があり，説得力がある。	序論―本論―結論の構成が確立し，情報が整理され，読み手に伝わりやすい内容である。	内容伝達に支障をきたす誤りが 1 パラグラフ 1 つ以下である。
B （3 点）	内容に一貫性がある。	序論―本論―結論の構成が確立している。	内容伝達に支障をきたす誤りが 1 パラグラフ 1 つ程度ある。
C （1 点）	内容に一貫性がない。	序論―本論―結論の構成が確立していない。	内容伝達に支障をきたす誤りが 1 パラグラフ 3 つ以上ある。

＊「内容伝達に支障をきたす誤り」の定義：① 主語＋動詞がない等，文として成立しないもの
② 時制等が間違っており，内容が伝わらないもの

結果：人数（%）

	内容	構成	正確さ
A（5 点）	1 人（1.4%）	0 人（0.0%）	13 人（18.3%）
B（3 点）	29 人（40.8%）	8 人（11.3%）	38 人（53.5%）
C（1 点）	41 人（57.7%）	63 人（88.7%）	20 人（28.2%）

生徒 1 人あたりが書いた平均語数：54.7 語

・ライティングテスト後のアンケート（7 月中旬実施：回答者数 70）

＊英文を書くうえで難しいと感じたことは何ですか。（複数回答可）

何を書いたらいいか思いつかなかった	英文の語順や文法がわからなかった	単語や表現がわからなかった	その他
38 人（52.8%）	47 人（65.3%）	58 人（80.6%）	3 人（0.1%）

＜分析と考察＞

CEFR-J による自己評価やアンケートの結果から，英語学習の重要性は認識しているものの，スピーキング能力とライティング能力に課題を感じている生徒が多いことがわかった。ライティングテストの平均産出語数は 54.7 語で，白紙回答もほとんどなく，生徒の書くことに対する意識は低くないと感じた。しかし，内容を見てみると，意見が不明瞭であったり，一貫性がなく内容が乏しかったりする作品が多かった。内容に一貫性のある意見文を，読み手にわかりやすい構成で書く能力の育成が課題であることを再認識した。

<u>リサーチ・クエスチョン</u>

身近な話題について，一貫性のある意見文を書く力を身につけさせるためには，どのような指導をすればよいか

改善の目安：ルーブリックの全項目の評価が B 以上の生徒が全体の 7 割を超える。

改善のための手だて

○ 授業内で英語を書く活動を増やせば，英語を書くことへの抵抗感が少なくなるだろう。

・教科書本文を学習する前のプレリーディング活動と，学習した後のポストリーディング活動において自分自身の考えや意見を書く活動を行う。

○ つなぎことばを使いながら自分の意見を述べる帯活動を行えば，論理的に意見を伝えることができるようになるだろう。

・文と文をつなぐディスコースマーカーを明示的に指導する。

・ペアワークとして，前時までのプレ・ポストリーディング活動で書いた内容（身近なトピックのもの）について，ディスコースマーカーを使いながら自分の意見を伝え合う活動を，毎時のウォームアップとして行う。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・CEFR-J 準拠の自己評価「書くこと」（１２月中旬実施：回答者数 71）

A1.1	A1.2	A1.3	A2.1	A2.2	B1.1	B1.2
5 人 (7.4%)	11 人 (16.2%)	16 人 (23.5%)	26 人 (38.2%)	9 人 (13.2%)	2 人 (2.9%)	0 人 (0.0%)

・第２回　アンケート（１２月中旬実施：回答者数 70）

１．４月から現在まで学習してきて，最も力が伸びたと実感できる技能はどれですか。（複数回答可）

リスニング	リーディング	スピーキング	ライティング
9 人（12.5%）	19 人（26.4%）	16 人（22.2%）	30 人（41.7%）

２．４月から現在まで学習してきて，まだ課題があると感じている技能はどれですか。（複数回答可）

リスニング	リーディング	スピーキング	ライティング
12 人（16.7%）	15 人（20.8%）	27 人（37.5%）	35 人（48.6%）

・第２回ライティングテスト（１２月中旬実施：受験者数 70）

トピック：あなたがゴミを減らすために取り組んでいること，または取り組みたいと思うことについて，身近な事例や経験などを取り上げて書きなさい。（20 分）

＊GTEC Basic 事前学習教材のライティング問題

評価方法：自作ルーブリックによる分析的評価（第１回と同じ）

結果：人数（%）

	内容	構成	正確さ
A（5 点）	19 人（26.8%）	19 人（26.8%）	19 人（26.8%）
B（3 点）	29 人（40.8%）	26 人（36.6%）	27 人（38.0%）
C（1 点）	22 人（31.0%）	25 人（35.2%）	24 人（33.8%）

生徒１人あたりの平均語数：48.6 語

＜分析と考察＞

CEFR-J による書く力の自己評価には顕著な変化は見られなかったが，４技能のうちでは最も多くの生徒たちがその向上を実感していた。同時に「まだ課題がある」と感じる技能としてもライティングを挙げる生徒が最も多かった。実際にまとまった英文を書くことで，ある程度書けたという自信と同時に，具体性を持ったそれぞれの課題が彼らの心に残ったのではないかと推察される。ライティングテストに関しては，第１回の方が比較的生徒が書きやすいトピックであったためか，平均産出語数は第２回の方が少なくなっている。ルーブリック評価では，「内容」「構成」の各項目で B 以上の評価がついた生徒が，それぞれ 42.3%から 68.6%，11.3%から 64.3%に増え，統計学的有意差も認められた（$p = 0.01, 0.00 < 0.05$: Wilcoxon の符号付き順位検定）。「正確さ」については 71.8%から 68.6%に減少してしまったが，これは「内容」により多くの注意が向いたための代償かもしれない。いずれも改善の目安とした 7 割以上には届かなかったが，一連の手だてに一定の効果があったと言ってよいだろう。

教師の変化

・目標を明確化することで，活動の意義や目的を深く考え，授業の流れを確立することができた。
・長期的な目標を立てることで，段階的な指導を行うことができた。
・主観ではなく数値で生徒の実態を把握し，共有することで，生徒と一体となった授業改善を行うことができた。

今後の課題（次の改善点など）

内容と構成に関しては，明示的な指導や授業内の活動において，文章を書く「型」を身につけさせることはできた。生徒から「英文を書く機会が増えたことで，英文に慣れることができた」「文章の基本的な書き方や構成を理解することができた」などの声も聞くことができた。一方，語彙や文法の正確性を向上させることには課題が残った。今後は，書く内容が増えても十分な正確さを保った英文を書けるよう，継続的に指導を工夫していきたいと思う。

まとめ・感想

今回の授業改善プロジェクトを通じ，生徒のニーズや能力を数値化して具体的に把握することで，目標が明確化され，教師と生徒が一体となった授業改善になると強く感じた。現在，私を含め，7 人の英語科教員で学年を担当しているが，共通のワークシートを使用する等，目標を共有し，意見を交換しながら授業改善に取り組むことができている。最後に，この研修で学ぶ機会をいただいたことに感謝するとともに，今後も英語教師として学び続ける姿勢を忘れず，自己研さんに励みたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

今井康人(著). (2011).『スーパー英文読解　英語を自動化するトレーニング基礎編』アルク
GTEC ベネッセの英語４技能検定　https://www.benesse.co.jp/gtec/　（2018 年 1 月 18 日）

まとまりと説得力のある文章を書くためのライティング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅰ	学 年	1	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は７クラス 277 名（男子 146 名，女子 131 名）の生徒である。活発なクラス，おとなしいクラスがあり，クラスによって雰囲気は異なるが，概して真面目に取り組む生徒が多い。大部分の生徒が大学進学を希望しているが，英語に対する苦手意識や自信のなさがうかがえる生徒も少なくない。

解決すべき課題

さまざまなテーマについて，説得力のある意見文を書けるようになってほしいのだが，適切な文構造が使えるようになっていないなど，まず短い文でのライティングスキルが不十分である。また，パラグラフの構造やつなぎことばについての指導も十分でなく，論理的な内容を英語で表現する活動にあまり取り組ませていない。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第１回英語授業にかかわるアンケート（６月実施：回答者数 274）

１．英語で文章を書くことに自信がありますか。

ある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	ない
2 人(0.7%)	20 人(7.3%)	87 人(31.8%)	165 人(60.2%)

２．英語で文章を書く力を伸ばしたいですか。

伸ばしたい	どちらかといえば伸ばしたい	どちらかといえば伸ばしたくない	伸ばしたくない
212 人(77.4%)	59 人(21.5%)	2 人(0.7%)	1 人(0.4%)

３．英語で文章を書くことに対する自信をつけるためには何が必要だと思いますか（2 つまで）。

アイディアを出す練習	使える単語を増やすこと	文法知識を増やすこと	文章構成を学ぶこと	つなぎことばを学ぶこと	たくさん書く経験	その他
28 人(10.2%)	128 人(46.7%)	144 人(52.6%)	75 人(27.4%)	36 人(13.1%)	83 人(30.3%)	2 人(0.7%)

92%の生徒が「英語で文章を書くことに自信がない」，もしくは「どちらかといえばない」と回答をした。一方，98.9%が「英語で文章を書く力を伸ばしたい」もしくは「どちらかといえば伸ばしたい」と考えている。どうすれば英語で文章を書くことに対して自信がつくかについては，約半数の生徒が「文法知識」や「単語」を増やすこと，約 3 割の生徒が「たくさん書く経験」「文章構成を学ぶこと」と答えている。自信がない反面，書く力を伸ばしたいという意欲はあり，書く活動に取り組む素地がある。自信のなさは，書く際に必要な知識や，表現をする経験不足に起因すると考えられる。文章構成やつなぎことばを指導し，それらを使って練習を重ねながら，その過程で語彙や文法知識を継続的に増やせれば自信がつくのではないだろうかと考えた。

・第１回ライティングテスト（６月実施：回答者数　274）

内　　容：「大学進学の是非」について，自分の意見とその理由を具体例や説明をつけて書く

評価方法：自作ルーブリックによる分析的評価（3 点以上を合格点として設定）

点数	内容	構造	正確さ
4	質問に対してふさわしい内容で答えられており，説明が論理的かつ説得力がある。	意見（主題文），理由（支持文）3 つ以上，結論文があり，理由が例や説明により詳しく述べられている。	SV の構造ができている。時制，語順など伝達に支障をきたすような誤りがない。自然で英語らしく，単純な文のくり返しではない。
3	質問に対してふさわしい内容で答えている。	意見（主題文），理由（支持文）2 つがあり，理由が説明されている。	SV の構造や，時制，語順など伝達に支障をきたすような誤りが 1～2 箇所にとどまる。
2	質問に対して答えている。	意見（主題文）と，理由（支持文）1～2 つが述べられている。	SV の構造や，時制，語順など伝達に支障をきたすような誤りが 3～4 箇所ある。
1	質問に対して答えていない。	意見（主題文）と理由（支持文）のどちらかのみ述べられている。	SV の構造や，時制，語順など伝達に支障をきたすような誤りが 5 箇所以上ある。

結　　果：

点数	内容	構造	正確さ
4	12 人(4.4%)	16 人(5.8%)	7 人(2.6%)
3	162 人(59.1%)	101 人(36.9%)	74 人(27.0%)
2	96 人(35.0%)	145 人(52.9%)	123 人(44.9%)
1	4 人(1.5%)	12 人(4.4%)	70 人(25.5%)

質問に対してはある程度適切に答えられているが（3 点以上に達した生徒が 63.5%），理由やそれを支える具体例等が不足し（3 点に達していない生徒が 57.3%），正確に文を書けていない生徒が多かった。（3 点に達していない生徒が 70.4%）。

リサーチ・クエスチョン

身近なテーマについて，自分の意見を説得力のある英文で（理由・根拠を説明しながら）書けるようにするにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：ルーブリックの各項目で 3 点（概ね満足）以上を取る生徒が全体の 7 割以上になる。

改善のための手だて

○ 正しい文構造を意識した短い作文練習を継続すれば，まとまった文章を書く際に，正確な文を使うことができるようになるだろう。

・短文の作文練習を行う。

・日本語で考えた内容を，うまく英語で表現にするために，英語の語順を意識させたり，簡単に言えるように発想を転換することなどを指導したりする。

○ パラグラフの構造やつなぎことばを明示的に指導すれば，より論理的で説得力のある文章を書けるようになるだろう。

・パラグラフの基本的な構造（主題文，支持文，結論文）を指導する。

・論理性を表すつなぎことばのリストを提示し，それらを使った作文練習に取り組ませる。

○ さまざまなトピックについて意見交換をする活動を継続して行えば，意見を持つこととその理由を考えることに慣れるだろう。

・さまざまなテーマに対し，「意見と理由 2 つを述べる練習」，「意見と理由 1 つと具体例 1 つを述べる練習」，「意見と理由 2 つとそれぞれに対する具体例を述べる練習」というように，段階的に表現する活動を帯活動等で行う。

・ペアやグループ活動として，意見発表を行う。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回英語授業にかかわるアンケート（１１月実施：回答者数　270）＊[　]内は前回の割合

１．英語で文章を書くことに自信がありますか。

ある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	ない
1 人(0.4%)[0.7%]	13 人(4.8%)[7.3%]	90 人(33.3%) [31.8%]	166 人(61.5%) [60.2%]

２．英語で文章を書く力を伸ばしたいですか。

伸ばしたい	どちらかといえば伸ばしたい	どちらかといえば伸ばしたくない	伸ばしたくない
190 人(70.4%)[77.4%]	74 人(27.4%)[21.5%]	3 人(1.1%) [0.7%]	2 人(0.7%) [0.4%]

３．英語で文章を書くことに対する自信をつけるためには何が必要だと思いますか（2 つまで）。

アイディアを出す練習	使える単語を増やすこと	文法知識を増やすこと	文章構成を学ぶこと	つなぎことばを学ぶこと	たくさん書く経験	その他
20 人(7.4%) [10.2%]	181 人(67.0%) [46.7%]	187 人(69.3%) [52.6%]	45 人(16.7%) [27.4%]	35 人(13.0%) [13.1%]	63 人(23.3%) [30.3%]	1 人(0.4%) [0.7%]

依然 9 割以上の生徒が「英語で文章を書くことに（どちらかといえば）自信がない」と答えている。同様に 9 割以上が「英語で文章を書く力を（どちらかといえば）伸ばしたい」と回答している。自信をつけるために必要なこととして「単語」「文法」が増えた一方，「文章構成を学ぶこと」の割合は減少した。また，事前調査以降変化したことについて自由記述式でたずねたところ，約半数が「文章構成がしやすくなった」「スラスラ書けるようになった」と回答し，2 割強が文法や語彙の面で成長があったと答えた。これらから，文章構成の知識をつけて練習を重ねた結果，文章構成については一定の自信をつけた一方，まとまった文章を書けるようになり，構成に意識を向けることが減り，単語・文法などの「正確さ」への意識がより向上した結果，自分の実力との差を実感して自信を持てないでいるのではないかと推測できる。また，より正確に自分の考えを伝えたいという欲求，および大学入試への 4 技能試験導入にともなう必要性から，書く力を伸ばす意欲は依然として高いと考えられる。

・第２回ライティングテスト（１１月実施：回答者数　268）

内　　容：「アルバイトの是非」について，自分の意見とその理由を具体例や説明をつけて書く

評価方法：自作ルーブリックによる分析的評価（3 点以上を合格点として設定）

結　　果：＊[　]内は前回の割合

点数	内容	構成	正確さ
4	43 人(15.7%)[4.4%]	27 人(9.9%)[5.8%]	14 人(5.1%)[2.6%]
3	182 人(66.4%)[59.1%]	171 人(62.4%)[36.9%]	105 人(38.3%)[27.0%]
2	42 人(15.3%)[35.0%]	68 人(24.8%)[52.9%]	126 人(46.0%)[44.9%]
1	1 人(0.4%)[1.5%]	2 人(0.7%)[4.4%]	23 人(8.4%)[25.5%]

各項目で目標とした 3 点以上を取った生徒の割合は，「内容」が 18.6%増加して 82.1%，「構造」が 29.6%増加して 72.3%，「正確さ」は 13.8%増加して 43.4%となった。事前事後のデータがそろっている 265 人のデータについて検定（Wilcoxon の符号付順位検定）にかけたところ，すべての観点の評価に有意な向上が認められた（$p = 0.00 < 0.05$ ）。「内容」「構造」については，パラグラフの構造や，つなぎことばの明示的指導，さらに，自分の意見を表明し，それを支える理由とその説明および具体例を示してまとめるという練習をくり返し行った結果，3 点以上の生徒が 7 割以上になる」という改善の目安に達した。一方，「正確さ」については，改善はされたが，目安には達しなかった。その原因としては，構造や流暢さに練習の重点を置いたこと，短文を書き，それを修正したものを書き直すという練習が不足したこと，改善の手だてを行った期間が約 5 カ月と短かったこと，テーマによって使う表現や文法が異なっていたこと等が考えられる。

教師の変化

長期，中期，短期的視野で身につける力を明らかにしたうえで授業計画や教材選定を行い，それを達成するための具体的手だてを考えて実行し，その結果を検証するというプロセスの重要性を再認識した。また，具体的に何をどう教え，何をどう練習すれば，当該能力が伸びるかを考え，それを単発的に数回実行するのではなく，くり返し指導し，練習させることが，生徒の能力を確実に上げられると実感した。さらに，このような改善のプロセスを，担当者間で協働的に行うことの重要性を意識するようになった。

今後の課題（次の改善点など）

改善の目安に達しなかった「正確さ」の改善が大きな課題であるが，文法を自分のものにさせるには，生徒自身に誤りに気づかせる工夫が必要である。単なる文法事項の説明だけでなく，文の組み立て方から丁寧に指導し，実際に書いたものを添削し，それを書き直させるというプロセスが手だてとして考えられる。その際「流暢さ」への意識を低下させないことが留意点である。文章全体の質を向上させるために，評価項目ごとのチェックシートを用いたり，Persuasive text（説得する文章）をより説得力あるものにするための構成を指導したりすることも有効だと思われる。さらに，生徒の関心の高いトピックを扱って，文章を書くことの楽しさを実感させることも動機づけとして必要かもしれない。

まとめ・感想

授業改善プロセスを同僚や生徒と共有し，「このような目的で練習をした結果，目標とするスキルの向上が認められた」という事実を明示することで信頼関係が深まる。単に 4 技能を使う機会を多く設けながら教科書を読み進めるのではなく，生徒が何でつまずいているかを正確に把握し，具体的に何を行えば目標を達成できるかを生徒と同僚に根拠を持って提案する必要がある。こうした継続的取組の成果を検証する授業改善のプロセスを通して，生徒が目標を達成し，英語（の授業）に対して自己肯定感を持つように保証することが教師の役割であると考える。一方で，このような系統立った改善手法は，データ分析等に相当の労力が必要になる。このような授業改善に取り組める環境が求められる。

授業改善にあたって参考にした資料等

佐野正之(編著). (2000).『アクション・リサーチのすすめ』大修館書店
佐野正之(編著). (2005).『はじめてのアクション・リサーチ』大修館書店

統合的，段階的なライティング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学 年	2	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は 3 クラス，合計 119 名（男子 70 名，女子 49 名）の生徒である。ほとんどの生徒が 4 年制大学への進学を希望している。何事にも前向きで，英語の授業にも積極的に取り組む。年度当初の調査で，9 割の生徒が英語を書く力を伸ばしたいと思っているということがわかっている。

解決すべき課題

まとまった英文を書くトレーニングが不足しているため，時間内に表現したい文を書くことができない。また，文の正確さや，構成にも課題がある。何を書くかアイディアが浮かばない生徒も多く見られる。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・英語 4 技能に対する自信度調査：10 段階の自己評価（6 月：回答者数 119）

技能	聞くこと	読むこと	話すこと	書くこと
自己評価平均	3.3	4.1	3.6	4.4

・第 1 回英作文テスト（6 月：受験者数 119）

生徒の現時点でのライティング力を知るために，英検 2 級のライティングの練習問題を使って英作文を書かせ，「内容」「構成」「正確さ」の評価項目からなる自作のルーブリックを用いて評価した。

トピック：「コンビニは 24 時間営業をすべきだ」（制限時間 25 分）

＊評価ルーブリック

	内容	構成	正確さ
A (5 点)	内容に一貫性があり，例・理由などによって深められている。	序論－本論－結論の構成が確立し，さらに結論に工夫が見られる。	内容伝達に支障をきたす誤りがない。
B (3 点)	内容に一貫性がある。	序論－本論－結論の構成が確立している。	内容伝達に支障をきたす誤りが 1 つある。
C (1 点)	内容に一貫性がない。	序論－本論－結論の構成が確立していない。	内容伝達に支障をきたす誤りが 2 つ以上ある。

＊英作文テスト ルーブリック評価の結果

	内容			構成			正確さ		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C
第１回	9 人 (8%)	72 人 (60%)	38 人 (32%)	7 人 (6%)	70 人 (59%)	42 人 (35%)	3 人 (3%)	27 人 (23%)	89 人 (74%)

・ペアワークに対する意識調査：4 件法アンケート（6 月：回答者数 119）

＊授業中にペアで取り組む活動は好きか？

好き	まあまあ好き	あまり好きではない	好きではない
50 人（42%）	45 人（38%）	19 人（16%）	5 人（ 4%）

＜分析と考察＞

10 段階のスケールで見てみると，4 技能に対する自信度は平均してどれも高いとは言えないが，そのなかでも「書くこと」に対しては比較的自信を持っていることがわかった。しかし，実際に英作文を書かせて「内容」「構成」「正確さ」の項目で評価したところ，全項目で B 以上の評価となった生徒はわずか 21%（25 人）であった。項目別に見てみると，「内容」について，一貫性がない文を書いた生徒が 32%いた。序論－本論－結論の「構成」が確立していないものがおよそ 35%であった。「正確さ」については，70%以上の生徒に内容伝達に支障をきたす誤りが 2 つ以上見られ，重点的に指導すべき項目であることを再認識した。ライティング指導に際し，授業中にさまざまな形態で活動させる可能性を見越して，ペアワークに対する好き嫌いをアンケートで確認したところ，80%の生徒が肯定的であった。このことから，ペアでのスピーキング活動や意見交換などをライティングにつなげていけるだろうと考えた。

<u>リサーチ・クエスチョン</u>

身近な話題について，自信をもって，ある程度まとまりのあるエッセイを書けるようにするには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：英作文テストにおいて，7 割以上の生徒が「内容」「構成」「正確さ」すべての項目で B 以上の評価となる。

<u>改善のための手だて</u>

○ 文構造を意識したスピーキング活動をさせれば，ライティング時の文構造への意識も高まるだろう。
- ・自主教材の会話フレーズシートを活用したペアワークを継続的に行い，S+V 構造や従属接続詞の定着を図る。

○ ライティングのプランニングの指導を工夫すれば，より論理的な英文が書けるようになるだろう。
- ・実際に書く前に，マッピングによって内容や論理構成の整理をさせる。
- ・ミニディベートで，論理構成の型に当てはめながら意見を相手に伝える練習をさせる。
- ・ペアワーク，グループワークによって，テーマに対する異なる意見を共有させる。

○ 生徒のライティングへのフィードバックのしかたを工夫すれば，ライティングに対する意欲が高まり，英語を書くことへの自信がつくだろう。
- ・誤りを指摘するだけでなく，内容や文構造が優れた作品に関しては個別に称賛を与える。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回英作文テスト：中間測定（１０月：受験者数 119）
　トピック：「将来，新聞でニュースを見る人が減るか」（制限時間 25 分）

・第３回英作文テスト：最終測定（１２月：受験者数 119）
　トピック：「大学生は１年間，留学すべきである」（制限時間 25 分）

＊英作文テスト ルーブリック評価の比較

	内容			構成			正確さ		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C
第１回	9 人 (8%)	72 人 (60%)	38 人 (32%)	7 人 (6%)	70 人 (59%)	42 人 (35%)	3 人 (3%)	27 人 (23%)	89 人 (74%)
第２回	51 人 (43%)	67 人 (56%)	1 人 (1%)	21 人 (18%)	84 人 (71%)	14 人 (12%)	35 人 (29%)	54 人 (45%)	30 人 (25%)
第３回	63 人 (53%)	45 人 (38%)	11 人 (9%)	35 人 (29%)	78 人 (66%)	6 人 (5%)	38 人 (32%)	63 人 (53%)	18 人 (15%)

＊「内容」「構造」「正確さ」全項目が B 以上になった生徒数(割合)の比較

第１回（６月）	第２回（１０月）	第３回（１２月）
25 人(21%)	60 人(50%)	87 人(73%)

＜分析と考察＞

まず項目別に見てみると，「内容」については，最終測定で B 以上が 90%になった。マインドマップを利用して，アイディアジェネレーションの練習をくり返したり，賛成の立場だけでなく，反対の立場の理由を考えたりしたことで，より論理的に英文を書くことができるようになったと思われる。第２回から第３回にかけて，C 評価の生徒の割合が増えてしまったのは，それぞれのトピックに関する知識や経験の差によるものかもしれない。「構成」については B 以上が 95%になった。論理構成のしかたやディスコースマーカーの使い方についての指導やミニディベート活動による練習によって，論理的に英文を書く意識を高めることができたと言ってよいだろう。「正確さ」については，C 評価が第１回の 74%から 15%まで減少したことから，帯活動として行った，会話フレーズシートを活用したペアワークや，文構造に関するフィードバックに一定の効果があったと思われる。また，事後のアンケートで 90%以上の生徒が「さらにライティングの力を向上させたい」と答えていることから，ライティングへの意欲を高めるフィードバックの効果もあったと考えられる。すべての評価項目で B 以上の生徒は 7 割を超え，改善の目標に達することができた。

＜追加分析：1 文の長さ，従属構造使用の推移＞

「熟達した学習者ほど算出する 1 文あたりの語数（mean length of utterace: MLU）が多くなる」という研究（Hawkins & Filipović, 2012）に基づき，生徒のライティングの MLU を算出したところ，その平均値に向上が見られた。さらに，MLU 値を左右すると考えられる従属構造（if/ when/ because/ that）

の使用状況を調べたところ，増加傾向が見られた。スピーキング活動での練習の成果がライティングにも表れたと言ってよいだろう。さらに，6 月の時点では 84%あった bacause 節の誤用も最終テストでは 12%に減少した。従属接続詞を含む文をくり返し産出する活動をしたため，それらの文法的特徴を認識し，正しく産出することが可能となったと思われる。

MLU の推移

	MLU	総語数平均	文数平均	標準偏差
６月	9.4	54.2	5.7	2.15
１０月	10.2	80.1	7.9	1.96
１２月	10.8	101.3	9.5	2.03

従属構造の使用状況（割合/119 人中）

	if	when	because	that
６月	35.3%	17.6%	8.4%	73.9%
１０月	21.8%	21.8%	38.7%	88.2%
１２月	66.4%	21.8%	46.2%	90.8%

教師の変化

今までは教師の情熱さえあれば，生徒の英語力は伸びるだろうと考えていた。しかし，ここ数年，生徒は楽しそうに授業に参加しているが，本当に英語の力が身についているのだろうかという疑問を抱いてきた。今回の研修で，理論に裏打ちされた授業実践のあり方を学び，自分自身でも英語教育に関してさらに研究・勉強を進めるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

今回の研究では，スピーキング活動を同じアウトプット活動であるライティング活動につなげることができた。これをきっかけに，技能統合的な活動のデザインや，そのような活動のための，異なる英語力の生徒に対応した支援のしかたなどについてさらに研究を深めたい。

まとめ・感想

４月からこの研修に参加し，毎時間教壇に立つことに，より緊張するようになった。それは，到達目標や活動の目的を明確にした指導計画を立て，自信を持って生徒と向き合わなくてはいけないと思い始めたからである。生徒に全力で授業に向かってもらえるよう，教師はその倍以上の労力を授業に向けなければいけないと感じた。今回の授業改善を含め，研修で学んだことを，教室にいる生徒や仲間の教師に還元し続けていきたいと思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

・沖原勝昭. (1985).『英語のライティング』大修館書店

・Hawkins, J. A. and Filipović, L. (2012). *Criterial features in L2 English.* Cambridge: Cambridge University Press.

生徒の自信を高めながら継続的に行うライティング指導

科目名	英語表現 II	学 年	2	形 態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は 3 クラス 119 名（男子 51 名， 女子 68 名）の生徒である。多くの生徒が意欲的に授業に取り組み，クラス全体が声を出して英語を発音する。また，ペア活動に積極的に取り組む生徒が多い。宿題を与えると 9 割の生徒が行う。

解決すべき課題

教科書の例文を覚えて，それを相手に伝えることはできるが，実際に新たな文法事項を使い自分のことや身近なことについて英語で話したり，書いたりすることに対しては消極的である。そのため，自己表現活動の機会を増やし，感想や意見を英語で表現できる力を身につけさせたい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・アンケート調査（５月：回答者数 119）

＊この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか？3 つ選んでください。

英語を聞く力	68 人（19.0%）	英語を話す力	103 人（28.9%）
英語を読む力	47 人（13.2%）	英語を書く力	69 人（19.3%）
単語や熟語の知識	31 人（ 8.7%）	文法の知識	39 人（10.9%）

＊あなたは身近なことについて簡単な英語で書くことに自信がありますか。

自信がある	4 人（ 3.4%）	どちらかといえば自信がある	19 人（16.0%）
どちらかといえば自信がない	78 人（65.5%）	自信がない	18 人（15.1%）

５月に事前調査として英語学習に関するアンケートを実施した。英語の授業で伸ばしたい力として，話す力に次いで書く力を伸ばしたいと思っている生徒が多くいることがわかった。その一方で，英作文に関する自己評価では，80.6%の生徒が「自信がない」と回答した。

・自由英作文テスト（５月:受験者数 119）

現時点での生徒の書く力を知るために，「あなたは本を読むとき，図書館へ行って読むのと，書店で買って読むのとでは，どちらが好きですか。あなたの考えとその理由を書きなさい」というトピッ

クで英作文を書かせた。これまでまとまった英文を書く機会がほとんどなかったため，主題文＋支持文＋結論文の構造が確立していないものが，全体の約 80%だった。また，主語＋動詞の構造や時制が正しく使えていない生徒が全体の 50%を超えていた。

＜分析と考察＞

多くの生徒が書く力を向上させたいと思っているが，自信がない生徒，書き方を知らない生徒が多いのが現状であった。また，実際に生徒の書いた英文の分析からも，文やパラグラフの基本構造が身についていない状況がわかった。そのため，書くことに対する抵抗感を小さくし，自信を持たせながら，明示的にライティングの指導を行う必要があること感じた。

リサーチ・クエスチョン

身近な話題について自分の意見をまとまった英文で書けるようするには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：ルーブリックの各項目で B 以上の評価がそれぞれ全体の 70%以上になる。

	内容	構造	正確さ
A （5 点）	内容に一貫性があり，説得力のある例や理由づけによって深められている。	主題文―支持文―結論文の構造が確立し，さらに結論文に工夫がみられる。	内容伝達に支障をきたす誤りがない(注)。
B （3 点）	内容に一貫性がある。	主題文―支持文―結論文の構造文が確立されている。	内容伝達に支障をきたす誤りが 1 つある。
C （1 点）	内容に一貫性がない。	主題文―支持文―結論文の構造文が確立されていない。	内容伝達に支障をきたす誤りが 2 つ以上ある。

（注）内容伝達に支障をきたす誤りは，語順・時制に絞っている。

改善のための手だて

○ 日常的に英作文の練習を継続すれば，英語で書くことに慣れ，自信も高まるだろう。

・毎授業 5 分間身近なことについて書く活動を実施し，個別にフィードバックを与える。
・よい点や改善できる点を全体で共有する。
・ルーブリックを生徒に提示し，英作文の際に注意する項目を意識づける。
・「主語＋動詞」の基本構造を習慣づける。

○ 英語のパラグラフ構造を明示的に指導すれば，まとまりのある英文を書けるようになるだろう。

・パラグラフの枠組みを事前に指導する。
・英作文のよい例と悪い例を比較させ，パラグラフを構成する際の英文のつなぎ方についての理解を深めさせる。
・自分の作品を他の生徒に読ませ，新たな表現や語彙に触れさせる機会を与える。
・評価ルーブリックを提示，説明し，活動の目的とライティングの到達目標を理解させる。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・事前テスト（５月），事後テスト（１２月）の結果比較（受験者数：119 名）

	内容			構造			正確さ		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C
事前テスト	1 人 (0.8%)	74 人 (62.2%)	44 人 (37.0%)	3 人 (2.5%)	30 人 (25.2%)	86 人 (72.3%)	13 人 (10.9%)	46 人 (38.7%)	60 人 (50.4%)
事後テスト	22 人 (18.5%)	80 人 (67.2%)	17 人 (14.3%)	9 人 (7.6%)	99 人 (83.2%)	11 人 (9.2%)	7 人 (5.9%)	48 人 (40.3%)	64 人 (53.8%)

・アンケート調査（１２月：回答者数 119）

＊英語の授業で書く力は身についたと思いますか。

身についた	30 人（25.2%）	どちらかといえば身についた	70 人（58.8%）
どちらかといえば身についていない	15 人（12.6%）	身についていない	4 人（ 3.4%）

＊あなたは身近なことについて簡単な英語で書くことに自信がありますか。

自信がある	11 人（ 9.2%）	どちらかといえば自信がある	49 人（41.2%）
どちらかといえば自信がない	39 人（32.8%）	自信がない	20 人（16.8%）

＜分析と考察＞

ルーブリック評価では，「正確さ」の項目においては改善の目安には達しなかったが，「内容」と「構造」の項目においては改善の目安としていた 7 割以上の生徒が B 以上の評価となった。「内容」については，説得力のある理由や自分の経験などを書ける生徒が増え，文章全体として一貫性のある内容を書けるようになった。「構造」については A 評価に達する生徒は少ないが，事前テストに比べて C 評価の生徒が 9.2%まで減少し，ほとんどの生徒がパラグラフ構造を理解し，それを意識して書けるようになった。また，「内容」「構造」の事前・事後の評価を検定（Wilcoxon の符号付順位検定）にかけたところ，統計学的に有意な向上が認められた（$p = 0.00 < 0.05$）。しかしながら，「正確さ」については A の人数が減り，C の人数が増えてしまった。これは，５月に比べて，英語で書くことに対する抵抗がなくなり，書く量が増えたため，その分誤りが増加したためと考えられる。

最終英作文後，簡単なアンケートを実施した。「英語の授業で書く力は身についたと思いますか」とたずねたところ，84%の生徒が「身についた」と答えた。また，事前アンケートでは「身近なことについて簡単な英語で書くことに自信がある」と答えた生徒は 19.4%だったが，１２月に実施したアンケートでは 50.4%になった。毎授業 5 分間身近なことについて書く活動を実施し，生徒自身書く量の増加を実感し，英作文に対する抵抗感がなくなったことが自信につながったと考えられる。

教師の変化

・その日の授業だけでなく，1 年間をとおして「生徒にどのような力を身につけさせたいか」ということについて，同僚の教師と話し合いながら，指導案や単元目標を考えるようになった。
・ルーブリックを生徒に提示することで，生徒と一緒に同じ目標に向かって授業をすることができた。また，評価項目を決めることで，その向上を目指した一貫した指導，評価をすることができた。
・アンケートを複数回実施したことにより，生徒の現状や興味を考慮しながら授業作りに取り組むことができた。

今後の課題（次の改善点など）

・書く量が増えても，必要最低限の「正確さ」に注意を向けさせるための指導，練習を続ける必要がある。そのため，生徒が間違えやすい文法の誤りを全体に共有し，その誤りを直すための活動を授業中に行う必要があると感じた。
・すべての生徒の作品を細かく確認することが難しかったため，効果的かつ効率的な添削方法を考える必要がある。
・今回は身近なことについて英語で書かせたが，日本語であっても書きたいことが思いつかない生徒も見られたため，プランニングの指導の必要を感じた。
・毎授業書く活動を行ったが，他の生徒の作品を読む機会はあっても，自分が書いた作品を他の生徒に口頭で伝える活動は行うことができなかった。今後は，書く活動を教科書英文の読解や話す活動などど結びつけて，統合的な活動として取り組ませたい。それにより，４技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成したい。

まとめ・感想

今回の取組を通して，ポートフォリオを活用しながらアクション・リサーチを実践し，授業の課題や生徒の実態を知ることができた。また，授業で行う活動を何のために行うか意識しながら授業を実践することができた。それにより，一貫した指導を行うことができた。ライティングの添削をする作業は大変だったが，回数を重ねるつれ生徒の書く力が向上しているのを感じた。この活動をとおして，生徒がわからない単語や間違えやすい文法の誤りを知るきっかけにもなった。生徒のなかには楽しんで英作文に取り組んでいるものもいた。ルーブリック評価やデータの活用方法などを学年・学校全体へと広げ，協同的に生徒の英語学習への意欲を高めていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

田畑光義・松井幸志. (2008).『パラグラフ・ライティング指導入門』大修館書店
大井恭子（編著). (2008).『パラグラフ・ライティング指導入門―中高での効果的なライティング指導のために―』大修館書店

平成 30 年度　英語教育アドヴァンスト研修　担当講師（50 音順）

江原　美明（えはら　よしあき）

グエン，トアー（NGUYEN, Thoa）

パリセ，ピーター（PARISE, Peter）

村越　亮治（むらこし　りょうじ）

平成 30 年度 英語教育アドヴァンスト研修
授業改善プロジェクト 報告書
－アクション・リサーチによる高等学校英語授業の実践－

発行日　平成 31 年 3 月 31 日
編　集　神奈川県立国際言語文化アカデミア
（担当）村越 亮治　江原 美明
発　行　神奈川県立国際言語文化アカデミア
横浜市栄区小菅ケ谷 1 丁目 2－1
℡ 045(896)1091